

「満洲引揚」スタディーズの試み¹⁾

整理、調査、議論

阿部 安成*

江竜 美子**

はじめに

本稿は、滋賀大学経済経営研究所（以下、EBR、と略記する）が所蔵する「満洲引揚資料」²⁾をめぐる保存と公開と活用についての記録と試論となる。この「満洲引揚資料」は、2003年1月に、EBRが法政大学大原社会問題研究所（以下、大原社研、と略記する）から譲り受けた資料群である。そのきっかけは、歴史資料の保存をめぐるセミナーで、大原社研に「満洲」引揚げにかんする資料があり、しかし研究所の業務としてはあつかえずにいるので、適切な引き取り手を探していると大原社研の所員から聞き、それを受けて2002年度EBR評議会でその受け入れを決定した。のちにふれるとおり、EBRが所蔵する歴史資料で「満洲」は1つの重要な領域となっているので（しかし資料受け入れはひとまず凍結していた）、それにかかわる資料の受領は、すでにある所蔵資料の活用の可能性をひろげるだろうとの見通しがあった。

そして、EBR調査資料室主任の阿部（2002～2005年度、2008年～2009年度）が大原社研を訪ね、所長と面談して資料の引き取りを確認した。搬入したときの箱数は13³⁾、資料

1) 本稿は、滋賀大学2007年度教育研究プロジェクトセンターの萌芽的研究プロジェクトに採択された「満洲引揚」スタディーズ・プロジェクトの成果の1つである。執筆分担は、「1. 「満洲引揚資料」の公開にむけて」が江竜（阿部が付記した脚注もある）、それ以外は阿部である。江竜執筆分は江竜が受講した2006年度国文学研究資料館アーカイブズ・カレッジ（短期コース）の修了論文に加筆した。

* 滋賀大学経済学部社会システム学科教授、滋賀大学経済経営研究所調査資料室主任兼任。

** 滋賀大学経済学部助手、滋賀大学経済経営研究所勤務。

2) 本資料はこれまでひとまずEBRの保管としてきたが、ここでの仮目録公開を機にEBR所蔵と明記することとした。また本資料のEBRでの保管状況については、国際善隣協会古海建一理事長に2007年2月9日にEBRにて確認していただいた。ご訪彦にあらためて感謝もうしあげます。

3) 搬入時の資料は「中国からの引揚記録」が3箱、「引揚者関係」が4箱、「引揚関係」が2箱、「満鉄関係」「国際善隣協会関係」「引揚史原稿」「満洲国史編纂資料」が1箱ずつと分類されて

の形態はそのほとんどが簿冊であり、その数は当初の見込みをはるかに超えたおよそ 600 点となった。EBRではこの資料群を、「満洲引揚資料」と呼ぶこととした。このコレクションの整理はまずは、阿部と滋賀大学教育学部の佐藤仁史（東洋史学）とで始めた。その翌年には、滋賀大学経済学部講演会に人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系に所属する加藤聖文を招いて研究会を開催し、加藤、佐藤、阿部が報告をおこない、「満洲」にとどまらずにそれ以外の地域もふくめた第二次世界大戦後の引揚研究の現状と、「満洲引揚資料」の概要とその意義の見通しを共有した⁴⁾。しかしその後、ほかの業務や研究のつごうにより、「満洲引揚資料」の整理はなかなか進展しなかった。

翌 2005 年には、滋賀大学経済学部ワークショップ Asian Studies Workshop 壱の研究会として「満洲引揚資料」の整理法がおこなわれ（2005 年 9 月 15・16 日）加藤、阿部にくわえて、滋賀大学経済学部附属史料館の青柳周一と、EBR の江竜美子の 4 名で目録づくりにかかった（2 日間の延べ人員 7 名）。その後、未入力データを追加し、それら全データをあらためて全資料とつきあわせながらその内容を統一し、それを 2007 年度に阿部が確認して、後掲の仮目録ができあがった。こうした経緯によりひとまず整ったこの仮目録は、加藤、佐藤、青柳、江竜、阿部の共同作業の成果ではあるが、その作成にもっとも尽力したのが江竜であることを、ここに明記しておく。その江竜による「満洲引揚資料」の報告を、のちに「1. 「満洲引揚資料」の公開に向けて」として掲げる。

0. プロジェクトの発足まで

そのまえにここで、「満洲引揚」スタディーズというテーマで、滋賀大学教育研究プロジェクトセンターの萌芽的プロジェクトに応募した経緯を記しておこう。2003 年の引き受け以来、ワークショップやシンポジウムに出席したりそこで報告したりするたびに、EBRで

いた。これがだれによる分類なのかは不明。

⁴⁾ 滋賀大学経済学部講演会（2004 年 12 月 8 日）の要旨は、『彦根論叢』第 347 号（2004 年 2 月）の学内消息に掲載した。また報告内容に加筆した論考を加藤と阿部の共著となる「「引揚げ」という歴史の問い方」上下（『彦根論叢』第 348 号、第 349 号、2004 年 5 月、7 月）として公刊した。このうち加藤執筆分に加筆した報告書として、加藤聖文『海外引揚問題と戦後日本人の東アジア観形成に関する基盤的研究』（2003 年度～2005 年度科学研究費補助金若手研究(A)研究成果報告書、2006 年）がある。

は「満洲引揚資料」の宣伝につとめてきた。また、京都大学人文科学研究所の山本有造教授が同研究所を退職するにあたり、山本教授所蔵の故石田興平教授の蔵書が2004年3月にEBRに寄贈され⁵⁾、これによりあらたにEBRと「満洲」研究者との交流が始まることとなった。

近代日本社会史を専攻領域に掲げる阿部にとって、EBR調査資料室の業務にかかわるようになって、アジアの各地域をおもに専攻する研究者との交流が増えていった。その賜物の1つに、2004年度日本移民学会ワークショップ（於京都大学）での報告をすすめられたこと、そこでの報告にさいしての蘭信三（京都大学、当時）との邂逅がある（2005年3月26・27日）⁶⁾。そして翌2006年12月23日には、科学研究費補助金基盤研究(B)(1)蘭班と滋賀大学経済学部ワークショップAsian Studies Workshopとの共催で、「引揚研究のフロンティアをめざして」をテーマとするプレシンポジウムが開かれた（於京都大学）。このプレシンポジウムは、第1報告が阿部「満洲引揚資料」とその読み方、第2報告が蘭「戦後日本社会にとっての「満洲」 - 満洲体験、中国残留体験を手がかりに」で、報告へのコメントを大野俊と福間良明がおこなった⁷⁾。

この報告でわたしは、2つのことを論じた。1つは「満洲引揚資料」とはなにか、2つめは「満洲引揚資料」はなにを問うかである。「満洲引揚資料」とはなにか、については、この資料群のなかにあるいくつかの目録（たとえば「引揚史編纂資料目録」など）や、「編纂企画協議会要録」といったテキストを用いて、このおよそ600点にわたる簿冊のなかにはなにがあるのか、それらに記されたことがらにはなにを明らかにするのか、を論じた。そこにあらわれたのは、一方にある「日本民族大陸発展の真摯な努力」と、他方にある「第

⁵⁾ 石田興平は彦根高等商業学校と滋賀大学経済学部の教官で、『満洲における植民地経済の史的展開』（ミネルヴァ書房、1964年）などの著作ある。この寄贈コレクションについては、目録に『滋賀大学経済経営研究所所蔵石田記念文庫目録』（滋賀大学経済経営研究所、2005年）があり、かんたんな解説に「資料紹介 滋賀大学経済経営研究所調査資料室報 石田記念文庫」（『彦根論叢』第354号、2005年5月）がある。

⁶⁾ ただしこのときの報告内容は引揚げではなく、彦根高等商業学校の海外修学旅行についてだった。蘭には、『満州移民』の歴史社会学（行路社、1994年）『中国帰国者の生活世界』（行路社、2000年）の著作がある。

⁷⁾ このシンポジウムの概要をEBRのホームページをとおしてWEB上に公開している（http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/kouenkai/WS12_23.htm）。

二次世界大戦の破局的終焉」や「本国送還等の悲惨な記録」との双方、つまり「満洲国」をめぐる「興亡史」という二面の歴史を描くという構想である。このように、いわば表裏として、あるいは光と影というように相反する両面として（ここで両面がどのようにつながるのか、関連するのかが重要なのだが、それはひとまずおく）、およそ 19 世紀後半から 20 世紀前半の日本とアジアの歴史を書くそのあらわし方は、現在も 1 つの社会意識としてあるといってよいだろう。もちろん、この「満洲引揚資料」というコレクションには、さきにあげた目録や要録に掲載された資料だけがあるのではないにしても、このテキストは、「満洲」をめぐる分裂する歴史意識の生成や挫折を明らかにする手がかりとなると、わたしは考えている。

では、このテキストを読むことや活用することで、わたしたちはなにを考えることとなるのだろうか。ここで問われている「満洲」をめぐる歴史の書き方をおおづかみにいえば、それは、建国から引揚げまでの歴史のあらわし方である⁸⁾。そうした歴史はこれまで、国家の発展から個人の悲惨への暗転として書かれたり、あるいは侵略か発展かが議論されたり、または、帝国主義をめぐる反省をするのか / 民族協和や王道主義の矜持を持つのかといった対象への向きあい方が問われたりしてきた。こうした「満洲」をめぐる二分した様相のなかでの歴史の叙述を、さまざまな個人の履歴や体験を記した文書を多くふくむ「満洲引揚資料」を用いることで、過去や歴史の意味を個の経験に即しておこなえるのではないかと、との見通しをわたしは持っている。

このとき、たとえば、澤地久枝の作品が参照事例となる⁹⁾。「反満抗日ゲリラのリーダー・楊靖宇の事跡をたずねること」を目的とした旅を記した、『もうひとつの満洲』（文春文庫、1986 年、元版 1982 年）という澤地の記録である。わたしは澤地の作品から、解きほぐしと編みなおしという術を知った。それは、「満洲」をめぐる政治や武力の対立のなかで、そこに暮すひとびとも対峙することとなってしまった事態への「呵責」や悔恨や痛苦がある

⁸⁾ ここにいう歴史を記した公式の記録の 1 つとしてわたしは、たとえば蘭の研究でも参照されている、満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』（河出書房新社、1962 年）をあげたが、これについてはプレシンポジウムで異論が出された。ただしこの議論は十分に展開しなかった。

⁹⁾ これについては前掲阿部・加藤「引揚げ」という歴史の問い方」上で述べた。

一方で、「満洲」で育ったものがそこに感じ取ってしまう「郷愁」がある。この両者をめぐる澤地自身のなかでの組み替えとなる。澤地が彼女自身をあらためて確認するためには、澤地の育った「満洲」を介してつながる、楊靖宇という他者の過去や歴史を活用する必要があった。これは他者を横領する試みでもある。楊靖宇からすれば、他者によって生きられることを機に(あらたに)意味を持つ過去や歴史が自己の軌跡にあったこととなる。澤地が楊靖宇の跡をたどって「満洲」歩きながら考えたように、「満洲引揚資料」を読みながら、会ったことのない歴大なひとびとの生をまえにして、「満洲」を、「引揚げ」を、歴史としてあらわす手立てを手探りながら、そのゆきつもどりつする惑いを自覚しつつ過去をわがものとする。こうした作業をつうじて、歴史学を必要としたわたしというものもわかるような気がしている。「満洲」も「引揚げ」もともに、それは現在の時点から(あるいは現在の時点において)再考されなくてはならない過去であるとともに、わたしが必要とする歴史学や、それを必要としたわたしを組み替える(つくりなおす)道具なのだと考えている¹⁰⁾。

さきのプレシンポジウムを企画した蘭はまた、前記の山本を班長とした、京都大学人文科学研究所で共同研究班「記憶と歴史 - 『満洲縁故者』の場合」(2002年度~2003年度)の一員でもあった。この共同研究の成果は、2007年3月に『満洲 記憶と歴史』(京都大学学術出版会)として公刊された。同書について、わたしはその書評を『週刊読書人』(第2719号、2007年5月)に執筆した。そこでの論点は、つぎのとおりである。

これまでの歴史学は、第二次世界大戦後の引揚げを十分に議論の対象としてこなかった。それはたんに、いわば研究の空白域として取り残されてきたというだけではなく、引揚げを議論したり表現したりする術を知らなかったのではないか、また引揚げを対象としなくてもよい歴史学とはなんだったのか、と引揚げの当事者たちに問われているのではないか、

¹⁰⁾ この蘭の企画によるプレシンポジウムは、「満洲引揚資料」を所蔵する滋賀大学経済学部でおこなわれる予定のシンポジウムの「プレ」という位置となっていた。そのシンポジウムを「満洲引揚」スタティーズ・プロジェクトとして2007年におこなう予定だったが、諸事情によりそれができなかった。また「満洲引揚資料」の活用をめぐる論点の提示も2004年度滋賀大学経済学部講演会から2005年滋賀大学経済学部ワークショップへ、そして2006年プレシンポジウムへと展開させなくてはならなかったが、これもまたうまくいっていない。今後も継続してこの課題を考えてゆきたい。

書名副題の「記憶と歴史」とは、そうした問いをあらわしている。しかし、「記憶」という方法、あるいは構えを提示したようだが、それをふまえて「満洲」あるいは「引揚げ」という歴史の書き方を更新できたのか、とわたしは問うたのだった¹¹⁾。

さらに最近では、京都大学人文科学研究所での共同研究班「記憶と歴史 - 『満洲縁故者』の場合」のメンバーだった坂部晶子が、『「満洲」経験の社会学 - 植民地の記憶のかたち』(世界思想社、2008年)を公刊した。「満洲」も「引揚げ」も、それらをめぐるさらなる論点の整理と議論の展開がもとめられているのである。

1. 「満洲引揚資料」の公開に向けて

所蔵資料の整理と保存と公開

「満洲引揚資料」は、満蒙同胞援護会(現在の国際善隣協会)¹²⁾などが作成した簿冊群



であり、『満蒙終戦史』(満蒙同胞援護会編、河出書房新社、1962年)や、『満洲国史』総論、各論(満洲国史編纂刊行会編、満蒙同胞援護会、1970年、1971年)の編纂に用いられた原稿などがふくまれている。満蒙同胞援護会から国際善隣協会に業務が引き継がれるとき

に、おそらく不要、あるいは使命を終えたと判断された蔵書類を整理しようとして、それらを文書資料類と図書類とに分けてしまい、そのうちの前者が、廃棄されようとしたとこ

11) こうした記憶と歴史をめぐる論点については、阿部安成「歴史から記憶へ、記憶から歴史へ」(阿部ほか『浮遊する「記憶」』青弓社、2005年)を参照。

12) 国際善隣協会は2006年11月27日に「引揚60周年記念の集い - いま後世に語り継ぐこと」を東京の九段会館で開催した。このとき第1部の基調講演(論題「満洲引揚げの実態について」)を前記の加藤がおこなった。この集いについては、『引揚60周年記念誌 - いま後世に語り継ぐこと』(国際善隣協会引揚60周年事業委員会、2007年)が発行された(ここに収録された加藤の講演論題は「歴史としての満洲引揚」となっている)。NHKBS2ではこの集いを「BSフォーラム 私にとっての満洲 - いま語りつくすこと」(2006年12月23日)として、「満洲」で青少年時代を過ごした各界の著名人が集まり、それぞれの引揚げの体験をとおして、そこから学びえたものはなんであったかを話し、た「メイン・イベント」(ナレーション)のみを放送した。

る、大原社研で仮保管されることとなったのちに、現在、EBRの所蔵となり、後者は「国際善隣協会のご厚意により」(はしがき)、拓殖大学図書館に寄贈されたのだろう。拓殖大学図書館では、「国際善隣文庫」の目録を刊行している¹³⁾。

ここでEBRの履歴をかたんにふりかえっておこう。EBRの経歴は、第二次世界大戦後の新制滋賀大学においては、1949年に設置された滋賀大学経済研究所に、さらに戦前の旧制彦根高等商業学校では、1923年におかれた調査課にさかのぼることができる。旧制の高等商業学校は実学を重視し、経済、経営、会計などの分野の図書や資料を収集してきた。当時、調査課は独自の分類法によって収集資料をあついていた。EBRでは1980年代から1990年代初めに、それらの旧制彦根高等商業学校収集資料のなかから、戦前期の日本の植民地や、日本の権益のおよんだ地域をめぐる調査報告書や観光パンフレット、諸種の要覧や概要を記した冊子、統計書などの日本語文献を「旧植民地関係資料」としてくくって、地域別の目録をつくった¹⁴⁾。その後も、「旧植民地関係資料」の書誌情報をデータベース化してWEB上で利用できるようにしたり、デジタルアーカイブで画像とした資料を公開したりしている (<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm>)¹⁵⁾。

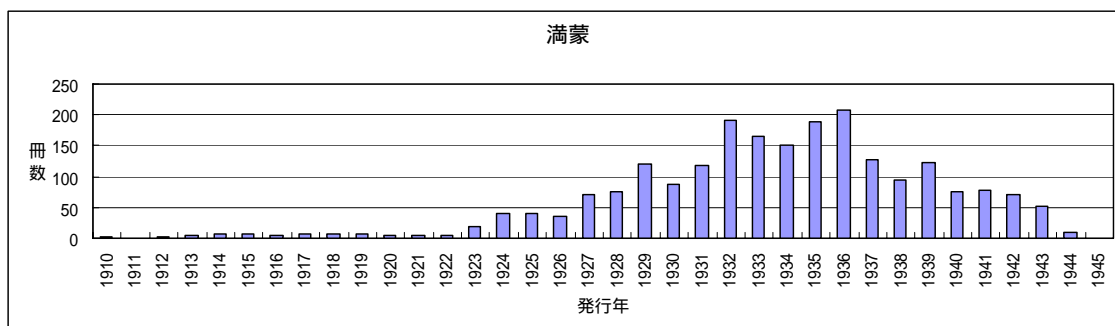
これら「旧植民地関係資料」のうち、「満洲」と「蒙古」にかんする資料は、およそ2400点。発行年代からみる分布は後掲のグラフのとおりである。わたしたちが現在「旧植民地関係資料」と呼んでいるコレクションは、当時の彦根高等商業学校にとっては、同時代のアジアの情勢を知るための資料であり、なかでも「満蒙」については、1932年の「満洲国」

¹³⁾ 前掲阿部・加藤「「引揚げ」という歴史の問い方」下、を参照。拓殖大学図書館では、『国際善隣文庫目録』(拓殖大学図書館蔵書目録第17輯、拓殖大学図書館編、拓殖大学図書館、2000年)を発行した。同文庫は「旧満蒙の歴史、経済、治安、教育、自治、民俗、伝記、紀行等の大正時代からの図書に止まらず、写真帖、雑誌、新聞等も含まれ、例えば旧満蒙に関する地図類も30部に及んで」いる(同目録所載「「国際善隣文庫目録」発刊に寄せて」国際善隣協会理事長執筆)。このコレクションは日本十進分類法にもとづいて分類されているが(同目録所載「凡例」)、加藤が指摘するところでは、そこにはいわゆる図書だけでなく、「難民救済事業要覧 瀋陽 日僑前後連絡総処 民国35(1949) 1冊 21cm K.Z-D457」といった「貴重な一次史料」もある。

¹⁴⁾ 目録は地域別に「満蒙」「支那」「朝鮮」「台湾・南洋・樺太」に分け、補遺をくわえた5冊を1982年から1992年にかけて発行した。

¹⁵⁾ 「旧植民地関係資料画像データベース - 朝鮮編」CD-ROM版(EBR、2002年)、「旧植民地関係資料画像データベース - 台湾・南方編」CD-ROM版(EBR、2004年)。

建国以降に発行された資料の収集冊数が増えていったことがわかる。当然のことながら、「旧植民地関係資料」の発行年代の分布と、彦根高等商業学校の創立から、戦時期の工業専門学校への転換（1944年）までの時期とは合致する¹⁶⁾。



ここで、「満洲引揚資料」の整理法について記しておこう。

資料を搬入当初の段ボール箱から中性紙の保存箱（箱の大きさはほぼ同じ）に入れ替える。

箱単位で整理をおこない、それぞれの資料1点ずつに番号を記した短冊をはさみ込む。資料1点は、ほぼ簿冊、袋、紐綴じの形態。劣化しているもの、綴じがほころびているものは、中性紙の封筒に入れて劣化や散逸を防ぐ。

仮目録用のフォーマット（下記）を作成し、資料1点ずつを入力していく。この段階では、資料内容の精査はおこなわず、資料の表書きを表題として採録する。

仮目録用フォーマット

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号	整理番号

さきに記したワークショップの作業（2005年9月）により、資料全体の3分の2の入力を終えた。その後、2006年1月～2月に残りの資料の入力をおこなった。資料すべての入

¹⁶⁾ なお江竜は2004年10月29・30日に新潟で開催された国際シンポジウム「中国東北と日本 - 資料の現状と課題」（主催新潟大学）において、この彦根高等商業学校の資料収集とその保存や公開について報告をした（報告書が刊行される予定だが未刊）。

力を終えたところで、2006年8月～9月に箱ごとに採録者が異なったために生じた異同を統一した。その後、仮目録が完成して、ひとまず、利用者の閲覧に応じる準備が整った。

「満洲引揚資料」の概要を、そのおもな表題を列挙することであらわしてみよう。()内には(箱番号 - 整理番号)を記した。

「陳情書」(1-1、1-13、1-51)、「功績調書」(2-26、2-27、2-28、2-32、2-35、2-38)、「収骨関係」(2-9、2-10、2-24)、「満洲省別概況」(3-4、3-10、3-11)、「追悼の辞」(4-9、4-38、4-39、4-40、4-41、4-44、4-50)、「功績調書」(5-36、5-37、5-38)、「口頭弁論調書」(6-25、6-27)、「遣送状況」(7-13、7-15、7-16、7-21、7-22、7-24、7-26、7-27、7-39、7-41、7-53)、「満洲省別概況」(8-1、8-12、8-14、8-20、8-21、8-22、8-23、8-24)、「遣送状況」(9-6、9-7、9-19、9-24、9-31)、「満洲国史関係」(10-1、10-2、10-3、10-4、10-5、10-7、10-9、10-10)、「満鉄外史」(11-5、11-6、11-7、11-8、11-9)、「ソ連の抑留生活」(12-20)、「難民の流入と救済状況」(12-21)、「満蒙会館」(13-15、13-16、13-20、13-21、13-22、13-23、13-24、13-25)

「満洲引揚資料」はその多くが、満蒙同胞援護会が業務をおこなううえで作成した一次資料である。さきに記したとおり、『満蒙終戦史』編纂のさいの原稿や、『満洲国史』編纂の過程での業務文書、あるいは、外務省、引揚援護局、満蒙同胞援護会、蒙古自治邦政府の用箋を用いた文書が主題別に綴られた簿冊などがある。これらは、「満洲国」とそこでの戦争終結時のようすや、そこからの引揚げの具体相を明らかにする資料群として重要な意義を持っている。資料の状態は、藁半紙に鉛筆書きやガリ版刷りの文書、いわゆる青焼きのものなど、かなり劣化していてビスケットのように崩れてしまう文書も多い。一般に酸性紙の劣化が指摘されているなかで、いまから60年ほどまえの戦後の引揚げにかかわる歴史資料の危機も知られるようになってきている¹⁷⁾。

仮目録ができあがれば、それを整備したうえで「満洲引揚資料」の公開となるが、それに向けては、この資料群に固有の特徴が問題となってあらわれることとなる。この資料は、

¹⁷⁾日本経済新聞編集局文化部の松岡資明による「戦後資料存亡の危機 - 旧満州引き揚げ団体の名簿や手記」(『日本経済新聞』2006年12月16日朝刊)は、国際善隣協会に残る大量の一次資料について、その保存をめぐる危機を伝えている。

史書編纂のための原稿、戦時補償のための基礎資料、体験者からの聞き取り原稿などからなるため、そこでの記述から引揚者個人のさまざまな情報を引き出すことができる。こうした資料の公開にかかわると考えられる法律は、つぎの 3 法である。 情報公開法、 個人情報保護法、 著作権法。

情報公開法第 2 条第 2 項第 2 号では、法人文書にふくまれない文書を、「政令で定める公文書館その他の施設において、政令で定めることにより、歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料として特別の管理がされている」ことにより、公開の対象としている。

EBR は 2004 年 3 月に、総務省が認める「歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料を扱う機関」としての指定を受けた。これにより、EBR が所蔵する「旧植民地関係資料」「戦前期営業報告書」「学校一覧」「戦前期逐次刊行物」は、「独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律」(情報公開法)にしたがって、公開されている。これらにくわえて、「満洲引揚資料」という一次資料を公開していく機関として、EBR にはなんら問題がない。

また、「特別の管理」の対象文書となれば、その文書の保存される可能性が将来にわたって高まるだけではなく、不開示とされる情報の範囲が狭くなると考えられる(「独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律施行令」第 2 条第 3 号イ、ロ。以下、施行令、と略記する)。

施行令第 1 条第 1 項では、政令で定める公文書館として国立公文書館などが列挙され、施行令第 2 条第 1 項では、「適切な管理を行う」(第 1 条第 1 項第 5 号)その他の機関として、大学文書館などを総務大臣が指定するための要件が示されている。その要件とは、専用の場所での適切な保存がなされていること(第 1 号)、目録の作成および目録が一般に供されていること(第 2 号)、一部資料をのぞき一般の利用の制限がないこと(第 3 号)、資料の利用方法や期間などの定めがあり、かつその定めが一般でもみられること(第 4 号)である。

EBRでは、要件としての第 1 号は、滋賀大学附属図書館棟内の「彦根高等商業学校旧蔵書等資料室」にて保管されていること、第 2 号は、すでに作成した仮目録をあてること、

第 3 号は、「資料利用内規」により利用者の制限をしていないこと、第 4 号は、「満洲引揚資料」の利用方法や期間などについての規程案を策定し、本学部の法学専攻教員との協議のあと、大学本部の法規係との調整をおこなう段階にあり、施行令をクリアできるのは時間の問題であることから、要件はすべて満たしている¹⁸⁾。

また現在、出納や閲覧のたびに紙片が大量に落ちてしまうという、「満洲引揚資料」劣化の事態については、施行令第 3 号八にいう「現本が破損している」ところの「一部資料」として、その利用を制限する考えである。

つぎに、個人情報保護法については、同法は生存する個人にかんする情報を対象とする法律であるため（第 2 条）引揚げからおよそ 60 年が経過した現在、「満洲」からの引揚げ者本人に不利益を与える可能性は、少ないと考えられる（ただし、遺家族の心情を忖度する必要はあろう）。

著作権法については、執筆者や作成者が特定できない文書もあるが、適切な対処をする予定である。

「満洲引揚資料」の公開はまず、冊子目録の発行と配布、WEB 上で検索できるデータベースを EBR のホームページにつくることから始める。EBR ホームページの「満洲引揚資料」のサイトでは、広報用に資料の一部のデジタル画像や資料概要を掲載して、利用者に提供する予定である。



「満洲引揚資料」の保存については、劣化を少しでも防ぐために、中性紙の段ボールと袋を併用して資料を収納すること、原則として資料の修理はおこなわないこと、を考えている。この資料群は、戦時そして戦後の質の悪い洋紙が用いられた時期に作成されたもの

¹⁸⁾ 情報公開法の解釈については、2006 年 12 月 8 日に開催された滋賀大学経済学部ワークショップ Asian Studies Workshop 式の平井孝典による報告「小樽商科大学百年史編纂室の活動内容等について」を参照した。

がふくまれ、資料の随所にフォクシング、亀裂、切れ、印字の退色、インク焼けがみられる。しかし、脱酸処理をおこなうには資料が劣化しすぎていて、また、資料の裏打ちやリーフキャストなどの修理をおこなうばあいの費用対効果をはかりづらいことが、その理由である。

劣化がすすむ原資料の代替保存として、保存と公開の必要性をふまえて、保存箱ごとにマイクロフィルムによる撮影をおこなってきた。2006年度学長裁量経費計画推進費で323点、24000コマを、2007年度特別教育研究経費（概算要求）で295点、23000コマの撮影をおこない、この2年度にわたる作業により、「満洲引揚資料」はその全点のマイクロフィルムによる撮影を終了した。この撮影完了により、「満洲引揚資料」はそのすべてがマイクロフィルムからの複製作成が可能となった。

2. 引揚げをめぐる財産の問題

歴史資料を持つということ

EBRで「満洲引揚資料」を所蔵するきっかけとなったワークショップやネットワークとおしての情報提供は、わたしたちのように歴史資料の管理のみを業務としているわけではない機関には、とてもありがたい勉強の機会となる。2007年の夏にも、ワークショップなどをとおして交流している機関から、まだ公開されていない、第二次世界大戦後の引揚げにかかわる歴史資料（史料）がまとまってあるあるとの教示を得た。

その引揚関係資料とは、「在外私有財産実態調査表」の綴である。この資料は、申告期間を1964年8月1日から9月30日までとした、「総理府提出用」の調査表で、私有財産の補償をするために、「終戦時の世帯について、在外私有財産の実態を、把握しようとする」目的でこの調査はおこなわれた。調査項目は、「在外地域調査」のAに始まり（朝鮮、台湾、樺太／千島、北方領土、関東州、満洲、蒙疆などから選択）、「在外事実調査」のB、「在外私有財産調査」のCまでの大項目がある。任意に開いた表では、「確認者」として「広島県引揚同胞更生会／会長瀬戸道一」の名が印刷されたうえに角朱印が押され、また、「調査者」に「広島県引揚同胞更生会府中市・郡支部／支部長菅波衛」の印刷（波下線部は青スタ

プの押印、ほかの文字は印刷)と丸朱印がある。終戦時に「満洲」にいた某がその当時どこに住んでいて、なにを持っていたかが、現金や預金、あるいは家財や衣類にいたるまで記されている詳細な調査表である。この調査表がなにであり、この時期が引揚げにかかわってどのような時代だったのか、現在のわたしにそれを十分に議論する用意はない。

戦後史を「引揚げ」と財産補償を軸に概観しよう。日本国の1945年敗戦後の、引揚者の在外財産をめぐる補償は、サンフランシスコ講和条約により、日本国および日本国民の財産の処分権は連合国が持ち、またかつての植民地における財産は日本国と現地当局とのあいだの「特別取極」によることとなり、引揚者の交渉先は日本政府となった¹⁹⁾。1953年以降、日本政府は在外財産問題調査会や在外財産問題審議会を設置し、また引揚者給付金等支給法(1957年)公布した。この「援護措置」としての給付金は、1967年の引揚者等に対する特別交付金の支給に関する法律により「在外財産喪失に着目する措置」が取られた。

こうした時期におこなわれた調査表であり、しかも詳細な個別の情報の記録であるので、これを保存する意義はある。そうではあっても、現在、資料を保管している機関の目的や方針に沿わなければ、この「在外私有財産実態調査表」群は管掌外の資料となる。また、わたしたち EBR にとっても、さきに記した「満洲引揚げ資料」とあわせ持つことによって、EBR1 か所で第二次世界大戦後の引揚げについて研究をすすめられる可能性がひろがる。しかし、この「在外私有財産実態調査表」はその内容がきわめて個別の調査内容となっているため、「満洲」からの引揚げの個別の事例を超えたなにを明らかにし、どのような議論を展開しうるのか、いまのわたしには見通しを持つことができなかった。

この個別の調査表は県別に綴られ、それが束となって、およそ250個のダンボール箱(40cm×45cm×30cm)に納められている。EBRでは2007年度評議会で、この「在外私有財産実態調査表」の受け入れを、その内容、状態、数量を検討したうえで可とすることを決定したが、閲覧の結果、受け入れられないと阿部が判断した(この調査閲覧の時点で阿部はEBR所長)。

¹⁹⁾ひとまず、若槻泰雄『戦後引揚げの記録』(時事通信社、1991年)を参照。てごかないいわゆる通史をみても引揚げや私有財産補償についての記述はない(松尾尊兌『国際国家への出発』日本の歴史21、集英社、1993年、中村政則『戦後史』岩波書店、2005年)。

この資料を保管するところでも、すでにどのようにしてこの資料群がそこで保管することとなったのか、その詳細の事情を知るものはすでにいず、そこの公務とはべつな経緯で、ひとまず、この資料群が保管されることとなったのだらうとのことである。こうした経緯は、のちに述べる資料をめぐる“Accumulating”か“Collecting”かの議論とかかわる。この資料群は、前者となる。

3. 国際ワークショップでの議論

2008年3月8日に、日本貿易振興機構アジア経済研究所（以下、アジ研、と略記する）にて、同所ほか主催で国際ワークショップ「日中米における満鉄関係資料等の利用と保存をめぐる諸問題」が開催された。当日のプログラムは、「米国議会図書館所蔵南満州鉄道株式会社関係資料の保管と利用について」（伊藤英一、米国議会図書館アジア部レファレンスライブラリアン）、「『中国館蔵満鉄資料聯合目録』編纂の意義と今後の課題」（魏海生、中国中央編訳局副局長・中国近現代史料学会副会長）、「デジタルアーカイブス『近現代アジアのなかの日本』：旧植民地関係資料の情報ポータルとして」（泉沢久美子、アジ研図書館）、「愛知大学東亜同文書院・東亜同文会雑誌記事DB化について」（成瀬さよ子、愛知大学図書館）、「小樽高等商業学校の教育研究活動と旧植民地関係図書資料」（平井孝典、小樽商科大学百年史編纂室）、「国立国会図書館における満鉄文書の所蔵と利用状況」（白岩一彦、国立国会図書館主題情報部）そしてその後の全体討論となる。

ここでは本稿の趣旨にかかわって、プログラムの 論点をふまえて議論するとしてよう。

（報告）米国議会図書館（The Library of Congress。以下、LC、と略記する）は、1800年創立、蔵書規模は1億3400万点（460言語）、その使命は「有用な情報資料を米国議会及び市民に提供」し、「全世界・人類の知的遺産と創造性を未来の世代のために保存する」図書館である。伊藤報告では、LCにおける「満鉄関係資料」の所蔵にいたる経緯、その整理と保管、今後の計画が紹介された。ここでわたしの関心をひいた点は、伊藤が示した図書館における所蔵資料をめぐる“Accumulating”か“Collecting”か、という論点である。

伊藤がひとまず、「滞積・堆積」か「収集・蔵書」かと表現したこの区分は、質疑のなかで、だれでも気づきそうなことがらだと思うが、伊藤の思いつきのオリジナルである、と補足説明された。伊藤は、前者のような図書館に「おかれてしまった」「きてしまった」という資料をどのようにあつかうのか考えるのか、と問うたのだった。報告後の質疑ではかならずしもこの論点が十分に議論されたわけではなかったが、EBR にとっての「満洲引揚資料」を考えるうえで、これはわたしにとって参照すべき問いとなった。

「滞積・堆積」か「収集・蔵書」かと区分してしまうと、前者は図書館にたまたま溜っていった、業務の対象とはならない、したがって活用されにくい資料という印象があり、後者は図書館が意図して集め、日々の業務であつかい、きちんと活用されるそれと考えられるだろう。偶然、非業務、死蔵の前者、目的、業務、活用の後者といってもよい。あるいは、“Accumulating” / “Collecting” という区分けならば、その対象がなにかという違いになるだろう。図書館で Accumulate するものと Collect するものは違うのだ、となる。“Accumulating” には継続性がある。大原社研における「満洲引揚資料」や、前記の「在外私有財産実態調査表」は、だんだんと積み重なるように溜っていったのではなく、一挙に移管された資料群かもしれない（大原社研のばあいはまさにそう）が、業務外の資料として活用されることのない保管のまま、ということでは同じこととなる。図書館にはそれぞれ使命と役割と目的がある。ときとして、それらからいくらか、あるいはおおいにはずれる資料が Accumulate されたり、それにちかきようすで図書館内におかれてしまったりすることがある。それをどのようにするかが、それぞれの図書館や資料所蔵機関での課題となる。

わたしたち EBR では、大原社研に Accumulate されたようにあった「満洲引揚資料」を譲り受け、それを Collect した。EBR では、わたしたちの使命や役割にみあう資料として「満洲引揚資料」を持ち込み、それを業務として整理し、その保存と公開にむけて所蔵状況を整え、活用のための手立てを整えつつある。こうした作業は、EBR にすでにある彦根高等商業学校収集資料（旧植民地関係資料をふくむ）や石田記念文庫のさらなる活用につながると思量してすすめたことであった。Accumulate された（ような）資料も、それにみ

あう系のある場所におきかえ、活用の可能性をひろげることができるだろう。わたしたち EBR における「満洲引揚資料」の整理は、そのための試みとなる。ただし、EBR では大原社研に Accumulate されたような「満洲引揚資料」は受け入れたが、しかし「在外私有財産実態調査表」についてはそうはしなかった。その理由は、1 つに資料の内容（それが伝えてくる過去のようす）、2 つに所蔵スペースの問題（それらを配架する場所がない）だった。資料そのものに内在する事態とそれに外在する事情により、EBR はその資料を見放したのである。さきにわたしは、「満洲引揚資料」を配置するにふさわしい資料をめぐる系が EBR にはある、と書いたが、しかしその系は未完の、そしてその意義と歴史がとつねに問われる、歴史資料をめぐるいわば文脈なのである。

この論点はさらには、1 つの体系としてであると受けとめてしまいがちな彦根高等商業学校収集資料というコレクションを問いなおすきっかけともなった。この資料群は、その収集の経緯がかならずしもよくわかってはいない。そこには、AccumulateされたものもCollectされたものも混ざっているだろう。伊藤が示した問いは、たとえば滋賀大学経済学部でいま所蔵している歴史資料とはなにかを考えることにもつながってゆく²⁰⁾。これは、つぎの小樽商科大学百年史編纂室平井孝典の報告ともかかわる。

(報告) 平井は報告の課題として、「旧植民地関係図書資料が収集された背景」と「歴史的に貴重な図書として保存できる体制と今後も利用できる体制」の 2 つを設けた。べつにいうと、歴史資料を「安定的」にあつかうためには、どのような体制をつくったらよいか、そのためには、大学史の「細かな、些細なこと」も大切にする、との方針をどのように実施してゆくか、となる。

旧制高等商業学校を母体とする国立大学法人の経済学部では、その高等商業学校が収集し所蔵してきた資料を保管しているところが多い。小樽商科大学でも EBR でも同じである。

²⁰⁾ これについては、阿部安成「研究ノート 彦根高等商業学校収集資料の可能性」(『NEWS LETTER』第 15 号、近現代東北アジア地域史研究会、2003 年 12 月)で論点を、阿部安成ほか「彦根高等商業学校収集資料のポリティクス」(『彦根論叢』第 344・345 号、2003 年 11 月)で共同研究の成果を示した。報告「『中国館蔵満鉄資料聯合目録』編纂の意義と今後の課題」(当日の配布レジュメは「中国に現存する満鉄資料の整理・保存と利用(要約)」)でも「満鉄資料」とは南満洲鉄道株式会社が編纂したり刊行したりしたものだけか、収集した資料もふくむのかといった論点が出された。

こうした歴史資料の所蔵機関ではおもに 1980 年代に、当時の研究動向と、アジア研の目録作成に要請されて、旧植民地関係資料という項目を設けて所蔵資料を再分類した。ここに、旧制高等商業学校と旧植民地地域あるいはアジアとの結びつきが、高等商業学校を母体とする教育機関によってあらためて創出されたのである。たしかに、山口高等商業学校のように、卒業生の「満韓地方」での従事を学校の方針として掲げたばあいもあったし、1930 年代末から 1940 年代初には多くの高等商業学校に、支那科、大陸科、東亜科などの学科課程が設けられたり、アジアへの修学旅行を実施したりしたところがあった²¹⁾。20 世紀前半の高等商業学校と植民地やアジアとのつながりはたしかにあったのだが、高等商業学校というこの点ばかりが強調されたり注目されたりしてしまう状況に対して、平井報告は、大学における資料（ここには歴史資料も大学法人文書もふくまれる）をできるだけ「安定的」に活かしてゆくには、大学が所蔵する資料には、その大学にみあった序列を設ける必要がある、と主張したのだとわたしは受け取った。

小樽高等商業学校では、卒業生に小林多喜二や伊藤整がいる。しかし、彼らは「有名な卒業生ではあるが、様々な方面で活躍している多数の卒業生の一人に過ぎない」のだから、小樽高等商業学校の卒業生にはもっとべつな着目の仕方があってもよい、「評価の定まっている個人の資料の保存は、極端に言えば市場原理にまかせてよいと思われるが、卒業生や教職員などの関係者で、評価の定まっていない人物の資料の収集こそ、その大学が検討すべき大きな課題かもしれない」と平井は提示した。さきに記した資料の序列は、その価値によって決められることとなる。その価値はまた、それぞれの資料所蔵機関が大学のなかに占める位置や認知の度合いにより、さらにはその大学の日本における位置づけによって決まってくるだろう。

歴史研究者や歴史資料にかかわるものはしばしば、なんでも、いつまでも保存しようとする、との非難、あるいは嘲笑を受けている。そうした発言をまったくしていないとして

²¹⁾ 山口高等商業学校における教育とアジアへの修学旅行については、阿部安成「大陸に興奮する修学旅行 - 山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」」(『中国 21』第 29 号、2008 年 3 月)を参照。

も、だ²²⁾。こうしたいいがかりは、きちんとした研究をしたこともなく、研究のために必要な資料（これはドキュメントといってもデータでもいい）ときちんと向きあったことのないものの愚考とかたづけでもよい。だが、現実には大学や学部での所蔵資料が、そこでの「政治」やさまざまな「綱引き」に塗れているのであるから、そこにどのようにみずから介入してゆくのかの自覚は必要である。

（報告）泉沢報告は、アジ研がWEB上で提供しているデジタルアーカイブス「近現代アジアのなかの日本」の紹介となった。アジ研ではかつて、『旧植民地関係機関刊行物総合目録』を刊行した。その事業をふまえて、「戦前・戦中期に日本の関係機関がアジア各国で刊行した膨大な刊行物について、書誌・所蔵情報をデータベース化し現在の所在を明らかにする。稀少な刊行物、劣化が激しい刊行物を電子画像化して利用可能にする。現物を保存し、次世代に伝える環境を整える」との目的を掲げて、アジ研は「旧植民地関係資料の情報ポータルをめざして」いるのである。このデータベースの意義は、1つにはかつての総合目録とその補遺版に収録された書誌と所蔵データ（49機関）に、NACSIS-CATに登録された関係資料の書誌と所蔵データ（539機関）を統合したり、国立情報学研究所（以下、NII、と略記する）による溯及入力事業によって新規登録された書誌と所蔵データを統合したりして、データを更新していることがあげられる。このNIIによる溯及入力事業では、2005年から毎年わたしたちEBRの申請も採択され（本学では唯一）²³⁾、山口大学や大分大学の経済学部とともに、所蔵資料書誌情報の溯及入力をすすめている。

もう1つは電子画像の公開であり、アジ研所蔵資料の電子化（4114点）、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーとのリンク（旧植民地関係資料、満鉄関係所蔵資料1009点）そしてわずかながらEBRのデジタルアーカイブ（約70点）もそこにくわわっている。

こうしたデジタルアーカイブスはとても費用のかかる事業で、アジ研では資料の撮影や

²²⁾ わたしは歴史資料をめぐる「まるごと」という論点を示したことはある。ただしそれはすべての資料をいつまでも保存するということとは異なる構えであった（阿部安成「旧制彦根高等商業学校というフィールド - 歴史の読み書きをレッスンする教室」『図書』第698号、2007年5月、を参照）。

²³⁾ なおこうしたNIIの溯及入力事業では、本学のばあい附属図書館を窓口とせざるをえない事情がある。しかしこれはあくまでEBRの蔵書が対象であり、わたしたちEBRが業務をおこなっているのである。

スキャンニング、そしてシステム製作の総額は2000万円くらいになったという。そこまでの資金がない機関では、どの資料を優先してマイクロフィルム撮影したりデジタル化したりするかを決めなくてはならない。前述と同様の判断や選択が、資料所蔵機関（そしてそこでの実務担当者）にもとめられるのである。それはわたしたち EBR にとっても同様で、マイクロフィルム撮影にさいしては、アジ研の総合目録を用いて、EBR にしかない資料や EBR をふくめて少数の機関にしかない資料を優先させ、デジタル化とその公開にあたっては、所蔵している資料の EBR での分布状況（どういう分野や領域の資料がどれだけあるか）、WEB でのカラー画像公開にふさわしい資料（できるだけヴィジュアルな資料として鳥瞰図などを選択した）、研究動向をふまえて（2002 年、2004 年時では「観光」とした）、資料を選択した。

20 世紀前半の紙媒体の文書や図書、とりわけ酸性紙のそれは温度と湿度が適切に保たれていない保管場所では、著しく劣化がすすむことがようやくひろく知られるようになった。しかし、機関によってはそうした環境を整えることがとても困難なばあいがある。やむをえず、現資料にかわる代替物（マイクロフィルムやデジタルデータ）による保存をおこなうには資料を選ばなくてはならない。また近年では公開や活用の見通しがない資料はその保存のための費用もつかない可能性があり、なおのこと、資料はただ保存するのではなく、公開と活用の手立てをはっきりとさせなくてはならなくなる。アジ研のような大規模な機関の事例は、小規模な機関にとって無縁なのではなく、さまざまなことを学ぶ機会として重要である²⁴⁾。

おわりに

すでに記したとおり、旧制高等商業学校を母体とする国立大学法人の経済学部では、そ

²⁴⁾ マイクロフィルム撮影やデジタル化の技術は数年で激しくかわることがある。この変化に対応するためにもワークショップなどでの情報交換が必要となる。デジタル化が廉価になり、他方でマイクロフィルム自体の高騰やメーカーによってはカメラの生産終了があり、マイクロフィルム撮影が高額になっている傾向があるなかで、どのような保存がふさわしいのか、所蔵機関ごとにくふうがもとめられている。またマイクロフィルムをスキャンするとき、白黒ではなくグレースケールがよいといったことも今回のワークショップでは教えられた。

のうちのいくつかの資料所蔵機関が旧植民地関係資料の目録を発行してきた。それらはおおむね、かつての高等商業学校が収集した図書などが主として収録されていて、多くの大学ではそこに新制大学になってからの収集図書などをふくめてはない²⁵⁾。わたしたちEBRでは、旧植民地関係資料をふくむ彦根高等商業学校収集資料に、2つの方向で資料をくわえていった²⁶⁾。1つは、彦根高等商業学校刊行物である。母体となった高等商業学校が収集して残した旧植民地関係資料の目録を編集した資料所蔵機関でも、その高等商業学校が刊行した文献を網羅するような、きちんとした目録をつくっている例はあまりない。EBRでは、「彦根高等商業学校刊行物目録稿」にくわえて、彦根高等商業学校時代から現在まで存続する同窓会である陵水会の蔵書の「陵水会所蔵資料目録(1)」も作成した²⁷⁾。これらの資料はもともとあったもので(陵水会の蔵書はEBRの調査によりあらためて「発見」された)あらたな収集ではないが、これまで目録が作成されていなかった歴史資料である。

もう1つが、前掲の石田記念文庫や「満洲引揚資料」など、彦根高等商業学校収集資料を補完したりその応用編ともいえたりするような資料群のあらたな収集である。山本教授が石田記念文庫を寄贈するにあたっては、同教授が所蔵する「満洲」関係の文書プリント版や図書の追加寄贈の受領が条件になっていたし、かつて満蒙同胞援護会で「満洲引揚資料」とともにあった資料の寄贈について加藤聖文からの打診もあった。EBRでは今後、「満洲」にかかわる資料が増えてゆく可能性がある。

「満洲引揚資料」をめぐるのは、ようやく仮目録の整備と公開にいたり、また研究動向を参照すれば、「満洲」と「引揚げ」をめぐる歴史像やその論点の提示もすすみつつある²⁸⁾

25)たとえば彦根高等商業学校と滋賀大学経済学部の場合は、前者の調査課が後者のEBRに、同じく図書課が附属図書館に継がれている。調査課と図書課で蔵書の分類法が異なり、図書課と附属図書館(日本十進法分類)でもそれが異なる。高等商業学校と大学とでは蔵書はほぼ分離されている。

26)所蔵資料の公開をめぐるのは、デジタルアーカイブスの構築は旧制高等商業学校系の経済学部ではEBRが嚆矢となつたし、またWEB上でのインターネット企画展の開催もEBRが初めてである(本学内でもWEBを活用した展示は初めて。第1回を2004年におこない、2008年3月から4月にかけて第4回「学問と勉め - 彦根高等商業学校の資産」を開催)。

27)前者は阿部安成「資料紹介 滋賀大学経済学部調査資料室報」(『彦根論叢』第350号、2004年12月) 後者は同報 (『彦根論叢』第363号、2006年11月)に掲載した。

28)大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館の総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻平成20年度入学者選抜試験問題として、「引揚げ問題」の研究史に

。EBRではこれからも、所蔵する「満洲引揚資料」の目録を整えつつ、1つではない複数の「満洲」と「引揚げ」をめぐる歴史の読み書きについて、発信してゆく予定である。

について、自分の問題意識を軸に、これまでの研究を批評して下さい。特に、成田龍一氏と阿部安成氏の研究に焦点を当てて」があった(2008年4月5日時点。
<http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/souken/mondai.html>)

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
1-1	請願書、陳情書、綴	昭和								綴	1		139		
1-2	半田先生追悼関係									綴	1	半田敏治の一周忌			
1-3	金銭出納帳					昭和41～47年				冊	1				
1-4	満洲主要都市見取図									綴	1	収骨記入用			
1-5	(満洲主要都市見取図)									綴	1				
1-6	善隣倶楽部									袋	1	「自昭和三十六年十一月至昭和四十年一月資産処理に関する総会事項」等同封			
1-7	資金凍結関係									綴	1	マル秘、極秘の印、財団法人満洲国関係帰国者援護会設立経緯説明書			
1-8	故半田先生追悼式関係書類	昭和	43	8	17					綴	1				
1-9	(地友会関係文書ファイル)					1957以降				綴	1				
1-10	三菱銀行									袋	1	中の袋に「訴訟に関する経緯」等			
1-11	(資産関係書類一括)									袋	1				
1-12	(満蒙同胞援護会社会保険関係書類綴)									綴	1				
1-13	元満洲国等外国政府職員之恩給問題に関する陳情書							満蒙関係恩給法改正期成同盟		綴	1				
1-14	(総選挙当選礼状)	昭和	38	12	25			衆議院議員八田貞義	都内千代田区有楽町陶々亭ビル五階 満蒙援護会内満蒙恩給同盟	状	1	封筒あり			
1-15	(恩給関係書類)							平塚貴士	東京都千代田区有楽町一ノ二(陶々亭六階)満蒙同胞援護会内 恩給法改正期成同盟本部	袋	1				
1-16	日朝、樺太、台湾、満蒙、南方定款									袋	1	「南方同胞援護会定款」等同封			
1-17	(株式売買関係書類)									袋	1	松村組 日活不動産			
1-18	当日 招待者名簿	昭和	40	11	7					綴	1				
1-19	募金整理簿	昭和	40	11				実行委員会		綴	1				
1-20	恩給同盟支部長名簿 附本部理事名簿							東京都港区新橋一丁目五番五号満蒙同胞援護会内満蒙関係恩給法改正期成		綴	1				
1-21	恩給法改正受益者名簿	昭和	43	6		照会				綴	1				
1-22	援護法の照会・回答	昭和	51	6		起		東京都港区新橋五・三二・六 興宣会内 満蒙関係恩給法改正期成同盟分室		綴	1				
1-23	(元満洲国政府等職員遺族恩給関係書類綴)									綴	1				
1-24	慰霊祭 写真									袋	1				
1-25	証憑物副本 三菱銀行書証追加分									袋	1				
1-26	会計書類 保存分									袋	1				
1-27	準備書類		30	9	9					袋	1				
1-28	(社団法人国際善隣協会案内)									袋	1				
1-29	三億円問題二開スル経緯書									綴	1	極秘の印			
1-30	訴訟関係綴 決裁及証憑書	昭和	32			以降				綴	1				
1-31	部隊通称号索引簿	昭和	23	4	1			留守業務局鮮満残務整理		綴	1	管理局在外法人課	111		
1-32	現代中華人名地名便覧 全	昭和	24	1		現在		外務省情報部		綴	1	中国朝鮮班	165		
1-33	瀋陽弘戾調									綴	1		163		
1-34	東北地方日本人遺骨調査表									綴	1				
1-35	(貸金台帳他綴)									綴	1				
1-36	労働者名簿							満蒙同胞援護会		綴	1				
1-37	(預金返還請求控訴事件判決書写)	昭和	39	9	7			東京高等裁判所第五民事部 裁判所書記官 鈴木小		綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
1-38	保険関係領収書	昭和	41	4				東京都港区新橋一丁目五番五号 社団法人国際善隣倶楽部		綴	1				
1-39	財団法人満蒙同胞援護会所有資料目録									仮綴	1				
1-40	資金凍結関係									綴	1	極秘の印			
1-41	準備書類 三井銀行		30	3	15					袋	1	仮綴6、準備書面、原告財団法人満蒙同胞援護会、被告株式会社三菱			
1-42	(預金返還請求事件判決書)	昭和	34	2	10			東京地方裁判所民事第一八部 裁判所書記官 小林茂郎		仮綴	1	マル秘の印			
1-43	大臣表彰状受賞者連名簿	昭和	46	2	1			財団法人満蒙同胞援護会		冊	1	田中保管 原本			
1-44	第二回大臣表彰受賞者名簿	昭和	49	4				社団法人国際善隣協会 東北地区連合協議会		冊	2	訂正原本			
1-45	大臣表彰状受賞者連名簿	昭和	46	2	1			財団法人満蒙同胞援護会		冊	1				
1-46	功績調査									状	560				
1-47	(表彰状関係書類一括)									仮綴	3				
1-48	ソ連長期抑留者処遇に関する請願									仮綴	1				
1-49	元満洲開拓農民及び開拓青年義勇隊員の墓参並びに遺骨集収に関する請願	昭和	41	4	17			満洲開拓殉難碑例祭執行の日 中華人民共和国 東北墓参・遺骨集収実現要求大会、主催全国開拓民自興会有志		状	1				
1-50	第四十八国会における質問原稿									仮綴	1				
1-51	旧軍人並に外国政府職員等の恩給に係る(陳情書)	昭和	42	11				吉野喜市	東京都港区新橋国際善隣会館内満蒙同胞援護会々々長 平島敏夫	袋	1				
1-52	[名簿]									綴	1				
1-53	顧問名簿									綴	1	原本 第二次 半沢用			
1-54	顧問名簿									仮綴	1	寄付受付名簿			
1-55	(満蒙官吏恩給問題関係文書綴)	昭和	34	9						仮綴	1				
1-56	恩給問題の現況と財政状態について	昭和	34	6	30			満蒙関係恩給法改正期成同盟北海道支部 支部長 富樫甚作		仮綴	1				
1-57	(満蒙関係恩給法改正期成同盟愛知県支部関係文書綴)									仮綴	1				
1-58	(宇津木猛雄訪問関係文書綴)									仮綴	1				
1-59	撫順戦犯者名簿(十七名)		35	9		現在				状	2				
1-60	[支部別収支表]					昭和30~37年				状	10				
1-61	[名簿その他]									状	3				
1-62	証券書類処理弁法									綴	1		181	雑資	
2-1	発翰等関係書類							満建碑会		綴	1				
2-2	基金受理委員会規定									袋	1				
2-3	発翰綴									綴	1				
2-4	陶々亭との契約書									綴	1	表紙に「三六・七イ」「除 貸借並びに弁済契約書関係」と書き込み			
2-5	陶陶亭金銭建物貸借契約書綴	昭和	29	5	1	起		東京都千代田有楽町一丁目二番地社団法人国際善隣倶楽部		綴	1	表紙に「重要」の印			
2-6	満史森脇氏原稿									袋	1	「6の内 2」と書き込み			
2-7	決算	昭和	28							袋	1	「秘」の印、「クラブ昭和二十八年決算」と書き込み			
2-8	中日友好協会代表団歓迎 芦溝橋事件30周年記念大法要に参加しよう！！					1967力		「七・七」三十周年記念事業実行委員会・日中友好宗教者懇話会		状	1	葉書1枚折り込み			
2-9	収骨関係綴							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
2-10	収骨問題現地調査票									状	2				
2-11	陶々亭関係書類	昭和	16							袋	1				
2-12	名簿綴									綴	1				
2-13	市長会等懇親会	昭和	43	6						綴	1				
2-14	(満蒙同胞援護会沿革)									状	13	綴じ穴あり			
2-15	(満拓会等名簿)									状	85	綴じ穴あり			
2-16	授与式写真									袋	1	写真4枚同封			
2-17	土地及家屋関係書類									袋	1				
2-18	恩給法改正期成同盟成立時の各支部会員名									綴	1				
2-19	(封筒)	昭和	41	7	12			社団法人興亜会会長日高信六郎 事務所東京都中央区日本橋室町四ノ二東邦生命日本橋支社事務局長蔭山茂人	港区芝新橋一 - 五 - 五 満蒙同胞援護会会長平島敏夫様	封筒	1	第二次世界大戦犠牲者追悼慰霊祭 案内・要領2通同封			
2-20	昭和四十七年度自四月一日清算完了 支払証憑書	昭和	47	4	1					綴	1				
2-21	昭和四十六年度支払証憑書	昭和	46							綴	1				
2-22	日鉱不動産との仮契約・本契約書類一切入									袋		「登記謄本」「登記済権利証」「登記済証」「借地権譲渡書」など書類名を書き込み			
2-23	鑑定書							青木一男		袋	1				
2-24	満州主要都市見取図(収骨用)									綴	1				
2-25	収骨委員会案									袋	1				
2-26	功績調書									袋	1	「井上氏樺太10月台湾10月朝鮮10」と書き込み			
2-27	功績調書									状	1				
2-28	功績調書									状	2	綴じ穴あり			
2-29	功績者連名簿									綴	1				
2-30	功績者連名簿									綴	1				
2-31	奉天会功績調書提出数									状	1				
2-32	功績調書									状	25	綴じ穴あり			
2-33	功績者連名簿(東京大連会)	昭和	44	9	30					綴	1				
2-34	功績者連名簿(熊岳城会)									綴	1	「44・3・11持参」と書き込み			
2-35	(功績調書・封筒)	昭和	44	3	12			京都市伏見区西奉行町伏見住宅九二三号後藤春吉	東京都港区新橋一の五の五満蒙同胞援護会内地区連合協議会御中	綴	1				
2-36	故人関係							興安会		綴	1				
2-37	満州開拓関係邦人救済功労者表彰申請書	昭和	45	3	18			開拓自興会		綴	1	「(先存者の部)」「九二名」と書き込み			
2-38	蓋平地区及奉天市功績調書書附(完)	昭和	42	1	10					袋	1	「川村民より受付」と書き込み			
2-39	(袋)									袋	1	「預金帳九通」と書き込み			
2-40	(預金取扱関係書類)	昭和	30	9	29			大阪市北区絹笠町四六番地株式会社三井銀行堂ビル支店	東京都千代田区有楽町一丁目二番地財団法人満蒙同胞援護会代表理事会長平島敏夫	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-41	普通預金通帳・名刺	昭和	20	10	15			株式会社住友銀行東京支店	満州国関係帰国者援護会	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-42	預金残高二関スル証明依頼書	昭和	20	12	27			財団法人満州国関係帰国者援護会	大阪市北区絹笠町四六番地株式会社帝国銀行堂ビル支店	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-43	(預金取扱関係書類)	昭和	20	12	27			株式会社三菱銀行丸ビル支店	満州国関係帰国者援護会	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-44	定期預金証書・名刺	昭和	20	9	1			株式会社三菱銀行本店営業部長小笠原光雄	財団法人満州国関係帰国者援護会御中	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-45	残高証明願・名刺	昭和	20	12	27			宇野末次郎	株式会社北海道拓殖銀行東京支店御中	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-46	定期預金証書・名刺	昭和	20	9	1			横浜正金銀行東京支店支配人代理藤村慶四郎	財団法人満州国関係帰国者援護会殿	袋	1	プラスチックケースで一括			

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
2-47	普通預金通帳・名刺							株式会社三菱銀行丸ビル支店	大月米一殿	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-48	定期預金証書・特別当座預金通帳	昭和	21	6	14			株式会社帝国銀行東京支店長代理林太郎	財団法人満蒙同胞援護会殿	袋	1	プラスチックケースで一括			
2-49	(封筒)							大阪市東区北浜五丁目株式会社住友銀行本店経理部	東京都千代田区有楽町一丁目二番地満蒙同胞援護会理事長飯沢重一殿	袋	1	債権者審査会関係書類を同封			
2-50	(封筒)	昭和	42	7	5			社団法人興亜会会長日高信六郎 事務所東京都中央区日本橋室町四ノ二東邦生命日本橋支社内事務局長蔭山茂人	港区芝新橋一丁目五番五号 満蒙同胞援護会御中	袋	1	第二次世界大戦犠牲者追悼慰霊祭執行要領・案内を同封			
2-51	(袋)									袋	1	「昭和四十五年四月分以降健康厚生保険領収証」綴と「源泉徴集分」綴を同封			
2-52	(封筒)							東京都中央区銀座東七丁目二番地日興ビル四階武岡嘉一法律事務所		袋	1	資金凍結関係判決文等を同封			
2-53	(武蔵)引揚陳情住宅陳情									袋	1	在外公館等借入金確認申請書等を同封			
2-54	解散前の謄本							市原事務所司法書士市原俊子東京都港区芝3丁目16番11号	財団法人満蒙同胞援護会様	袋	1				
2-55	昭和三四.八.七判決言渡 原本領収 山口 34.8.11	昭和	34	8	11					袋	1	預金返還請求事件関係書類を同封			
2-56	40 - 五月 上告理由書	昭和	40	5						袋	1	上告理由書等を同封			
2-57	陶々亭関係資料									袋	1	不動産評価書等を同封			
3-1	満洲国史執筆資料目録							満洲国史編纂刊行会		冊	1	メモ2枚同封			
3-2	雑書類綴	昭和	21	11		以降		全満日本人会居留民会残務整理委員会		綴	1	総処所要経費・忠霊塔・各地遣送人員	156		
3-3	特別資料を貰ふ人の名簿									綴	1		162		
3-4	満洲省別概況									綴	1	六の一、三江省・牡丹江省・東安省・浜江省	173		
3-5	昭和二十一年胡芦島よりの引揚一覧	昭和	21							綴	1	当時満蒙援に連絡のあった人々			198
3-6	引揚の概況	昭和	33	11	8			舞鶴地方引揚援護局		冊	1	昭和三三年十一月八日閉局式に出			191
3-7	乗船名簿				6	30		瀋陽第九十八大隊・撫順第二十一大隊・瀋陽第九十九大隊・第一中隊及第二中隊		綴	1	六月三十日第壹船			188
3-8	瀋陽状況							坪川用		綴	1	借入金審査状況	164		
3-9	満鮮状況情報綴									綴	1	終戦初期、秘	137		40
3-10	満洲省別概況									綴	1	六の四、四平省・安東省・奉天省・錦州省	176		
3-11	満洲省別概況									綴	1	六の三、間島省・通化省・吉林省	175		
3-12	終戦後の延吉市									綴	1		61		
3-13	地点別年表									綴	1	参考	148		29
3-14	公職追放の満洲関係会社・東京都内引揚者定着寮・東北中共軍一覧表(昭和二十三年)	昭和	23							綴	1		147		
3-15	昭和二十一年自一月四月に至る内地終戦後の新聞と論集	昭和	21			1月 - 4月				綴	1		149		
3-16	外務省二対スル報告書綴							全満日本人会居留民会残務整理委員会		綴	1	引揚史に相当スル	146		
3-17	残務整理書類									綴	1	瀋陽孤児名簿・各種請願書	167		
3-18	嫩江居留民名簿	昭和	20	9	10	現在		嫩江日本人居留民会		綴	1		143		

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
3-19	旧満洲開拓団誌・満洲農業移民概要・元満洲開拓民及満洲開拓青年義勇隊員に対する国家処遇改善に関する陳情書	昭和	30	7	28			開拓自興会		綴	1		185		借
3-20	在外資産書類									綴	1		157		
3-21	(原稿「モンテシルバ」送付他)	昭和	31	4	10			白山丸船長吉沢理一	船員課長津田敬二	仮綴	3	他2点は引揚資料とは無関係の雑文			
3-22	満洲開発史目次							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1				36
3-23	終戦後日本人拉致抑留に関し国連提出資料							山本		綴	1	留用類	125		
3-24	終戦時二於ケル在外邦人処理交渉記録(主トシテソ、連占領地区及中国)									綴	1		118		
3-25	日僑俘管理計画綱要草案・日本官兵与日僑遣送帰国計画							山本		綴	1		124		
3-26	未遣送地区遣送計画資料	昭和	21	8				東北日僑善後連絡総処		綴	1		123		東北/F/2-1
3-27	遣送実績及見透し(二十一年)	昭和	21							綴	1	附(大連事情)中間報告	122		
3-28	哈尔滨A							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1	終戦後の東北状況 哈尔滨地区調査資料, 哈尔滨引揚者吉沢幸吉手録	47		
3-29	東北導報索引							編史班		綴	1	自昭和二十一年三月十七日(一号)至昭和二十二年七月三十一日(四百五十九号)	117		26
3-30	物価調査表(釜山二十年末)									綴	1	自昭和二十年十二月十三日至昭和二十一年三月二十七日 女子ノ性病・物価調査表	116		
3-31	留用者の推移(技術員)							編史班		綴	1	戸籍の問題	85		21
3-32	中共実話(武田克二十四年)									綴	1		144		
3-33	参考資料 証券									綴	1		159		
3-34	来訪者・抑留者名簿									綴	1		158		
3-35	地図 満洲行政区画図・鉄道略図・開拓農民入植図									袋	1		168		
3-36	全満埋骨数									袋	1				
3-37	終戦直後の満洲事情									綴	1				194
3-38	留用管理班業務概況									綴	1		166		
4-1	情報綴(満洲)							情報課		綴	1	極秘, 満洲の近況 密使携行			
4-2	哈尔滨市日本人会及引揚の状況									綴	1				
4-3	昭和二十三年(第四次引揚)に於ける満洲事情									綴	1				
4-4	引揚状況及名簿									綴	1				
4-5	中共地区(松花江)遣送状況							編史班		綴	1				
4-6	終戦後の錦州事情	昭和	21	8	20			錦州市日僑善後連絡処主任山田金三郎		綴	1				
4-7	阜新市(終戦 二一、五遣送)							編史班		綴	1				
4-8	在満関東州会社投資額等調							調査部二課		綴	1	業種別			
4-9	追悼の辞	昭和	35	10	23			岡村寧次		仮綴	1				
4-10	事業報告書・会計収支決算書	昭和	43			度		社団法人国際善隣倶楽部		冊	1				
4-11	平壤竜山墓地 その平面図と埋葬者名簿									袋	1				
4-12	大連市地図									状	1				
4-13	伏水会報第5号・第6号・会報すずらん第4号	昭和				40年8月20日・41年8月10日・41年12月20日		伏水会本部・社団法人全国清津会		綴	1				
4-14	錦州地区連行者名簿・同集中営事情									綴	1				
4-15	錦州市(終戦 二三、六)							編史班		綴	1				
4-16	終戦前後の在満邦人統計表							山本		綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
4-17	ソ連地区第十五次帰還者 白山丸乗船者名簿							佐々木用		綴	1	真岡出港昭和三十三年一月二十三日・舞鶴入港昭和三十三年一月二十七日、乗船人員五四九名			
4-18	第十五次ソ連地域帰還者受入業務報告	昭和	33	1				舞鶴地方引揚援護局		綴	1				
4-19	樺太引揚状況(太原関係残留者名簿)	昭和				21年1月10日現在・23年11月		財団法人在外同胞援護会・財団法人樺太協会北海道支部		綴	1	其後の樺太引揚げ同胞(第二輯)・太原関係残留者			
4-20	舞鶴報告									綴	1				
4-21	難民日本送還ニ関スル件(昭和二十年十二月調)	昭和	20	12						仮綴	1				
4-22	現地情報									仮綴	1				
4-23	中共治下安東を中心とする状況、遣送実績及今后ノ見透ニ付テ	昭和	21	4	18	現在				仮綴	1	秘			
4-24	滿蒙同胞援護会九州連合支部弘報課情報第三号 各地状況	昭和	21	7	11					仮綴	1	秘			
4-25	地点別年度別集結略人口表	昭和				約20年12月-21年7月				綴	1				
4-26	哈尔滨B							編史班		綴	1				
4-27	滿洲省別概況									綴	1	六の五、熱河省・興安総省・関東州			
4-28	天翔るべき	昭和	56	11	3			大同学院第十八期生記念会誌編集委員会		冊	1				
4-29	中華週報	中華民國	59			59年1月12日-12月28日		中華民國駐日大使館新聞処		綴	1	第498号-第548号			
4-30	ソ連地区(外蒙古樺太千島を含む)残留者名	昭和	30	3	10			未帰還調査部		冊	1				
4-31	中国経済技術資料図集(第二集)			5			1961	中国経済技術研究所		冊	1				
4-32	竹下文庫図書目録(滿蒙関係)									仮綴	1				
4-33	高橋文庫図書目録(滿蒙関係)									仮綴	1				
4-34	滿蒙援関係図書目録									仮綴	1				
4-35	(年表断片)									状	1	昭和6年9月の部分			
4-36	資料第八十七号中共、農業合作社運営の解説と批判・第八十八号中共、アジア、アフリカ諸国との貿易情况・第八十九号台湾政治の病状診断、= 監察院の本年度総検討 =	昭和	31	6	20			国際善隣倶楽部アジア資料室		冊	1				
4-37	弔辞	昭和	27	7	5			滿蒙関係終戦犠牲者合同慰霊祭執行委員長平島敏夫		状	1	包有り			
4-38	追悼之辞	昭和	37	10	5			遺族代表紀内洋枝		状	1	包有り			
4-39	追悼の辞	昭和	27	7	5			外務大臣岡崎勝男		状	1	包有り			
4-40	追悼之辞	昭和	37	10	5			滿蒙関係終戦殉難者追悼法要執行委員長平島敏夫		状	1				
4-41	追悼之辞	昭和	35	10	7			滿蒙関係終戦殉難者追悼法要執行委員長平島敏夫		状	1				
4-42	献詠	昭和	34	9	18			橘幽石		状	1	包有り			
4-43	追悼の言葉	昭和	34	9	18			厚生大臣渡辺良夫		状	1	包有り			
4-44	追悼の辞	昭和	34	9	18			内閣総理大臣岸信介		状	1	包有り			
4-45	(追悼の辞下書)									状	1	一部			
4-46	国立国会図書館図書貸出申込票									状	1	封筒有り			
4-47	追悼の辞	昭和	27	7	5			衆議院議長林譲治		状	1	封筒有り			
4-48	厚生大臣弔辞	昭和	27	7	5			厚生大臣吉武恵市		状	1				
4-49	弔辞	昭和	27	7	5			農林大臣広川弘禪		状	1				
4-50	追悼の辞	昭和	32	10	27			財団法人滿蒙同胞援護会会長平島敏夫		状	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
4-51	(追悼の辞)	昭和	37	10				満蒙関係終戦殉難者追悼 法要執行委員長平島敏夫		状	1	4-40の下書			
4-52	写真									袋	1	満洲国史口絵写真5枚,ネガ			
5-1	引揚検疫史(第一部)	昭和	22	10				引揚救護院検疫局		冊	1		80		
5-2	東北導報社説集							山本紀綱		綴	1	自昭和二十一年五月至々十二月	81		
5-3	中共地域強制抑留者名簿(李徳全携行名簿 のうち二十八名分)	昭和	34	1	20	現在				仮綴	1				
5-4	基本財産一部処分	昭和	40	8				事務局		綴	1	外務省申請書			
5-5	昭和四十六年度元帳									綴	1				
5-6	満蒙援 訴訟関係									袋	1				
5-7	満鉄会 功績調書	昭和	44	10	6	持参		財団法人満鉄会		袋	1	61枚			
5-8	決済原本	昭和	43	3						袋	1				
5-9	社団法人国際善隣倶楽部事務局規則(案)									仮綴	1				
5-10	職員旅費内規(案)							社団法人国際善隣倶楽部		仮綴	1				
5-11	財団法人日本退職公務員連盟寄付行為	昭和	27	4	28	文部大臣 設立許可				冊	1				
5-12	支部長会議記録	昭和	37	4	21					綴	1				
5-13	表彰者調書について	昭和								袋	1				
5-14	昭和四十二年以降海外引揚者名簿	昭和								綴	1				
5-15	戦没者追悼式参列者	昭和	43			度				綴	1				
5-16	栄典関係書類綴	昭和	38	9	20			財団法人満蒙同胞援護会 会長平島敏夫		綴	1				
5-17	戦没者追悼式参列者	昭和	45			度				綴	1				
5-18	大臣表彰状受賞者連名簿	昭和	46	2	1			財団法人満蒙同胞援護会		冊	1				
5-19	表彰申請者連名簿							財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1				
5-20	引継書	昭和						財団法人満蒙同胞援護会		綴	1				
5-21	昭和四十七年自七月一日至十一月二十四日 間元帳									綴	1				
5-22	昭和四十七年自四月一日至六月三十日間元 帳									綴	1				
5-23	審査基準綴									綴	1	借入金 坪川	108		
5-24	在外公館等借入金確認要求書処理状況	昭和	26	6	7	現在				綴	2				
5-25	借入金関係訴状在中									綴	1		150		
5-26	雑書類 一、在外公館等借入金受理 二、民 国三十七年(昭和二十三年)書類									綴	1		152		
5-27	総合調書(満洲地区)			2	14		1950	編史班		綴	1	満洲邦人救済資料(救済借上金経 緯),原稿(重複不用)	89		25
5-28	終戦時在満ソ連軍の邦人に対する態度	昭和	25	7	20			編史班		綴	1	暴行状況	88		24
5-29	在住証明書	昭和						財団法人満蒙同胞援護会 会長平島敏夫		袋	1				
5-30	基金問題処理第一回委員会議事録									綴	1				
5-31	基金問題関係支払決済及証憑書									綴	1	昭和三十一年末までの分			
5-32	大陸時報 13号~24号	昭和	21	2	1			大陸引揚者連絡本部 社団法人国際善隣協会・ 東北地区連合協議会 外務大臣愛知揆一		綴	1				
5-33	第二回大臣表彰受賞者名簿	昭和	49	4				財団法人満蒙同胞援護会		冊	1				
5-34	表彰状	昭和	45							状	1	下書き			
5-35	表彰申請者連名簿									仮綴	1				
5-36	功績調書									状	1				558
5-37	功績調書							財団法人満蒙同胞援護会	金勝久	仮綴	1				
5-38	功績調書									状	1	白紙、裏に鉛筆書メモ			
5-39	(功績調書に添えられた手紙)	昭和	46	1	6			伊藤顯敏	内田仙次	仮綴	1	46.1.9受付と朱書き			
5-40	(大原万千石など)							上野		仮綴	1				
5-41	大東亜戦争在外邦人救済引揚功労者表彰に 関する請願書(附 熊岳城副会長及開原副会 長の往復書幹)							元満洲開原日本人居留民 会副会長吉永哲文		冊	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
5-42	外地における民間功労者の恩賞又は表彰方促進について									仮綴	1				
5-43	東北地方日本人遺骨送還に関する請願書	昭和	35	3	3			財団法人満蒙同胞援護会 会長平島敏男 興安会	中華人民共和国紅十字 会々々長李徳全先生	状	1	封筒有り			
5-44	第一回功績調書									綴	1				
5-45	大陸同胞救援情報 自第一号(二〇・八・九 - 二〇・八・三一)至第十四号(二一・二・十一)							大陸引揚者連絡本部・満 洲引揚者相談所		綴	1	提供 杉目昇			134の二
5-46	資産処理関係資料・職員履歴書綴	昭和	40							綴	2	「資産処理関係資料」は綴られてお らず表紙があるほかは仮綴、状など			
5-47	国家行事 追悼式関係									綴	1				
5-48	(裁判関係書類)	昭和	29					(武岡嘉一法律事務所)		袋	1				
5-49	内外ビル関係資料	昭和	27							袋	1	仮綴の資料14点。内外ビル関係経 費証憑書綴・旧満洲国大使館たりし 康徳会館に関する問題記録・元柱公 使陳述要旨 など			
5-50	弔辞	昭和	35	10	23			遺子代表手島織枝		状	1				
6-1	(満鉄関係ノート)									冊	1	「満鉄模範備人の彰表」「鮮支漫遊 紀行」などの記事有り			
6-2	(封筒)									袋	1	「6の内No.5満史原稿」と書き込み、 「第四章 医療施設」等の原稿			
6-3	(満鉄関係ノート)									冊	1	「守備隊撤退後の満鉄沿線の警備」 「満鉄社長の選定」等の項目有り			
6-4	(断簡)									状	1	「諸事項篇衛生第七章の原稿の資 料」と書き込み			
6-5	(封筒)									袋	1	「香取本 露支協定情報」と書き込み			
6-6	(封筒)									袋	1	「6の内 6 満史原稿」と書き込みあり、 「満鉄の衛生施設」の原稿同封、 クリップ別置			
6-7	(封筒)									袋	1	「6の内 3 満史原稿清書面 第七 章」と書き込みあり、「第一節 公衆 衛生」等の原稿同封			
6-8	親邦家事見習中の満洲国少女の書翰	昭和	19	10						冊	1				
6-9	国立引揚者団体記録	昭和	33	11	7			藤村三郎編・国立引揚者 団体支部発行		冊	1				
6-10	満洲主要都市見取図(収骨用)									綴	1				
6-11	収骨趣意書規約									袋	1	収骨関係書類同封			
6-12	昭和四十四年度戦没者追悼式参列者	昭和	44							綴	1				
6-13	(封筒)									袋	1	「6の内 4 守中、村上、佐々原稿 在中」と書き込み、「セールメント工 業」等の原稿同封			
6-14	倶楽部研究委員会記録	昭和	46	7						袋	1	「四六・七〜一二」と書き込み、研究 委員会ノート等を同封			
6-15	第一回分功績調書									袋	1	「コピー(不要分)二重となる」と書き 込み、功績調書を同封			
6-16	満州校友会満洲会書類									袋	1	事務分掌及職制并定款を同封			
6-17	国際善隣倶楽部史資料	昭和	45	1						綴	1				
6-18	(封筒)									袋	1	「6の内 1 満史資料 第七章衛生 (資料に過ぎない)」と書き込み、日 本産業衛生協会満洲地方会会報等 を同封			
6-19	(封筒)									袋	1	「満史会中村法芳様 宇佐美寛爾氏 (二四〇頁)」と書き込み、宇佐美寛 爾氏追悼座談会原稿を同封			

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
6-20	報告資料									袋	1	満史会設立趣旨書等を同封			
6-21	カード関係(各大学カタログ診査)									袋	1	書目抄録ノートを同封			
6-22	自興会									袋	1	青溝子開拓団追記等を同封			
6-23	中国問題研究所									袋	1	中国関係原稿等を同封			
6-24	理事会							東京都港区新橋一丁目五番五号社団法人国際善隣	350-13狭山市入間川一三三七-五九安達為也様	袋	1	貸借対照表等綴を同封			
6-25	口頭弁論調査									袋	1	口頭弁論調査を同封			
6-26	(封筒)			5	27			194町田市玉川学園三一九-一 丹野喜博様		袋	1	裏に「5月27日 安達さん」と書き込み、大同学院同窓会宛封筒を同封			
6-27	口頭弁論調査 速記録									袋	1	口頭弁論調査等を同封			
6-28	(新聞記事・英語書簡等綴)	昭和	29	2	22					仮綴	1	「香取氏 29/2/22(月)」と書き込んだ紙片を合綴			
7-1	瀋陽=奉天(終戦-国府軍進駐)							編史班		綴	1		15		13 1
7-2	大連港出入船舶の状況について									綴	1		5		
7-3	大連状況報告									綴	1		1		
7-4	阜新、錦州、北票の八路の状況							阜新炭坑中島正・編史班		綴	1		55		
7-5	齊々哈爾関係資料							和歌山世話課		綴	1	真鍋政夫提供	45		
7-6	本溪湖留用者名簿	昭和	24	3	23					綴	1		26		
7-7	文官屯居留民会誌	昭和	29	8	28			民会長 加藤正男		綴	1		25		
7-8	大連地区(終戦後の関東州)附旅順地区(終戦-二、八)							編史班		綴	1		2		18
7-9	大連食糧協議会世話人資金について									綴	1		4		
7-10	終戦後の間島省事情									綴	1		59		
7-11	大連地区殺人事件真相									綴	1		3		
7-12	新京=長春(終戦-九、二〇)(警察関係)新京崩るるの日(長春地区残留者名簿)							編史班		綴	1		35		1 2
7-13	在長春邦人遣送状況									綴	1		34		
7-14	熱河省事情									綴	1		46		
7-15	撫順(終戦-二三、六、遣送)							編史班		綴	1		27		13 56
7-16	鉄嶺市(終戦-二二、六遣送)							編史班		綴	1		28		13 7
7-17	瀋陽總処分区分長名簿									綴	1		24		
7-18	奉天省引揚調査資料									綴	1		23		
7-19	瀋陽終戦後一ヶ年事情報告									綴	1	年表、北條報告	21		
7-20	在満日本人財産処理に関する記録							編史班		綴	1		128		8
7-21	遼陽に於ける終戦後の状況(終戦-二一、六、遣送)							編史班		綴	1		12		13
7-22	齊々哈爾(終戦-二一、九、遣送)							編史班		綴	1		44		3
7-23	新站街(終戦-二一、八)							編史班		綴	1		43~3		2 2
7-24	吉林市及其周辺の状況(永吉県、磐石県、樺甸県、蛟河県、蘭県、敦化県)(終戦-二一、九、遣送)							編史班		綴	1		43~2		2 1
7-25	終戦後に於ける吉林市及其ノ周辺地区の情勢							内田仙次		綴	1		43-4		
7-26	四平(終戦-二一、七遣送)西安(二一、二現在)							編史班		綴	1		30		14 1
7-27	大石橋(營口、瓦房店、蓋平、能岳城、普蘭店、城子疃、貔子窩を含む)(終戦-二一、十二、遣送)							編史班		綴	1		10		13 8
7-28	終戦後大連に於ける新聞発行の経過							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1		8		16
7-29	能岳城街(終戦-二一、一)							編史班		綴	1		9		13 9
7-30	各地状況(哈爾濱、齊々哈爾、北安、通興、通北、延吉、図們、和竜、竜井、通化、蛟河、鳳城、大連、營口)(終戦-略二一、九)									綴	1	中共地区	7		
7-31	旧奉天忠霊塔仕末記(附)終戦後の遁残兵の状況							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1		19		
7-32	榑谷日誌									綴	1		6		

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
7-33	終戦前後に於ける関東州事情(日僑の生活)							長田寛太郎		袋	1	袋に「大連 長田氏に借用」号1-2」とあり			
7-34	奉天学校関係情報							奉天農大教授		綴	1		20		17
7-35	地図 新京 浄月潭									袋	1	開拓団地図	37		
7-36	瀋陽衛生関係報告ほか	昭和						千種峯三ほか		一括	1	自終戦至国府軍進駐瀋陽日本人概況・終戦後、各期別各地日本人概況・国府軍進駐後、日僑総処・瀋陽日僑救済状況・瀋陽衛生関係報告、長春日本人状況、長春遣送・新京崩ルル日・長春民主々義団体活動・東北地区戦犯者処理記録			
7-37	瀋陽を中心とした全満居留民会会計報告 附対中国借款一覧表									綴	1	自三十五年五月至三十七年八月	169		7
7-38	ソ連軍関東州進駐状況 早期帰還者報告	昭和	20	12	14			(財団法人満洲国関係帰国者救護会)		綴	1		102		
7-39	蘇家屯 附管口(終戦 - 二一、六、遣送)							編史班		綴	1		14		13 11
7-40	長春民会の創立当時	昭和	34	3	4			第一代会長 小野寺直		綴	1				
7-41	新京 = 長春に於ける日本人の状況(終戦 - 二一、一〇遣送)							編史班		綴	1		33		1 1
7-42	長春日僑生活誌抄 昭和二〇・八・九 ~ 二一・一〇・三							編史班		綴	1		39		1 4
7-43	赤十字 家庭新聞							編史班		綴	1		172		
7-44	管公吏引揚状況									綴	1		171		
7-45	情報収集 回覧									綴	1		170		
7-46	西安炭坑の現況									綴	1		31		
7-47	瀋陽難民救済事業要覧(附)孤児事情									綴	1		22		
7-48	鉄道警護隊の顛末							若山七五郎、川俣兼吉		綴	1				
7-49	新京芸能人活動状況							編史班		綴	1		42		
7-50	長春証券整理及輸送状況									綴	1		40		
7-51	瀋陽工業会について 奉天工業施設の状況							編史班		綴	1		18		13 4
7-52	瀋陽衛生関係報告書							編史班		綴	1		17		13 3
7-53	公主嶺(終戦 - 二一、七、遣送)							編史班		綴	1		32		2 3
7-54	瀋陽に於ける救済業務報告									綴	1		16		
7-55	吉林日本人会事情									綴	1		43-1		
7-56	長春日僑善後連絡処機構その他									綴	1		38		
7-57	ソ連進駐下の長春							編史班		綴	1		36		1 3
7-58	長春に於ける財産処理について									綴	1		41		
7-59	間島地区終戦後の事情							元延吉日本人居留民会委員長 松田熊太郎		綴	1		60		
7-60	戦地関係							編史班		綴	1		75		
7-61	通化事件							編史班		綴	1		66		
8-1	満洲省別概況									綴	1	六の六、ハルビン市・長春市・瀋陽市	178		
8-2	在満邦人引揚及び残留概況	昭和	24	6				外務省管理局引揚調査室		仮綴	1				
8-3	生還の記(二龍山開拓団戦災状況報告書)							元二龍山在満国民学校校長 深田信四郎		冊	1				
8-4	地点別邦人留用機関一覧	昭和	25	3	1	現在		外務省管理局引揚課第一調査班		仮綴	1				
8-5	資料									袋	1	平山さんより			
8-6	華僑調査資料第三号(九月九日) 在日華僑経済実態調査報告書(昭和二十二年度調査総括)	昭和	22	9	9			経済安定本部総裁官房企画部調査課		綴	1				
8-7	(東北九省各市県日僑存管理所組織綱要等一括)									綴	1				
8-8	中共東北地区衛生関係留用者調									綴	1	昭和二十四年以降につき省く	93		11特 27
8-9	東北解放区行政区画一覧表			8		現在	1949	外務省管理局引揚課第一調査班		綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
8-10	終戦後の満洲の教育 含関東州							編史班		綴	1		84		19
8-11	中共地域強制抑留者名簿・撫順戦犯抑留者 日本人名簿	昭和				34年1月 20日現 在・35年9 月1日現 在・35年9 月17日現 在				仮綴・状	5				
8-12	満洲省別概況									一括	1		92		
8-13	国共戦線に阻まれて									綴	1	森弘氏内地密行録の一部 長春 開原まで	96		特23
8-14	満洲省別概況									綴	1	六の一、三江省・牡丹江省・東安省・ 浜江省・ハルビン市	173		
8-15	在満日本人会沿革概要							進藤誠一		綴	1	長春	76		42
8-16	中共地区引揚状況									綴	1	放送原稿	95		
8-17	胡芦島に於ける外務省員活動状況							編史班		綴	1	「芦蘆島」と誤記	82		13
8-18	引揚に関する米ソ協定									綴	1	主として日本より朝鮮へソ連地区よ り日本へ	97		
8-19	日本居留民の宗教事情							編史班		綴	1		83		18
8-20	満洲省別概況	昭和	26	12				外務省アジア局引揚調査		綴	1	三江省概況			
8-21	満洲省別概況	昭和	26	11				外務省管理局引揚課		綴	1	黒河省概況			
8-22	満洲省別概況	昭和	26	11				外務省管理局引揚課		綴	1	牡丹江省概況			
8-23	満洲省別概況	昭和	26	8				外務省管理局引揚課		綴	1	北安省概況			
8-24	満洲省別概況	昭和	26	12				外務省アジア局引揚調査		綴	1	間島省概況			
8-25	東北日籍学校沿革概要									綴	1		92		特19
8-26	引揚地図									袋	1				
8-27	国府軍進駐後に於ける東北日僑善後連絡総 処概況							岡秀雄		綴	1		77		5
8-28	三十九年 未帰還問題									綴	1				
8-29	東北日籍学校状況報告							東北日僑善後連絡総処教 育科		綴	1	重要保存	91		
8-30	四平省							編史班		綴	1		29		14-2
8-31	瀋陽未請求調	昭和	27	8	15			坪川		綴	1				90
8-32	一心隊概況									綴	1		184		雑資
9-1	東方文教協会状況									綴	1		72		
9-2	終戦後の鞍山									綴	1		11の2		
9-3	中共地区邦人の状況							編史班		綴	1		90		
9-4	日ソ開戦後満洲各地 ソ連中共軍国府軍進 入撤退状況一覧表(年月日)							編史班		綴	1		114		28
9-5	終戦直後を中心とする満洲の情勢									綴	1		73		
9-6	孫呉在住日本人引揚状況(終戦 - 二一、七 遣送)							編史班		綴	1		68		5
9-7	佳木斯を中心とする三江省難民状況(終戦 - 二一、七遣送)							編史班		綴	1		65		6
9-8	興安総省(終戦時及その後の状況)							編史班		綴	1		69		17
9-9	[[終戦直後ヲ中心トスル東北情勢]他)									綴	1	終戦直後ヲ中心トスル東北情勢・終 戦前後ニオケル満系要人ノ動静主ト シテ満洲国状況・在満日本人会沿革 概要・日僑遣送・中央地区遣送・ 島ニオケル外務省員活動状況・留 用技術員工ノ推移・中央地区状況・ 満鉄終戦後ノ状況、「山本氏より」と 書き込み			
9-10	引揚者名簿 山本氏より									綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
9-11	全国支部代表者会議	昭和	29	5	26					綴	1	二十九年五月、二十八年十一月満蒙援概要、三十年五月興亡史編纂の現況、三十年八月満蒙援概況	161		
9-12	開拓民団の状況									綴	1		105		
9-13	牡丹江に於ける引揚状況									綴	1		67		
9-14	終戦以後満系要人の動静									綴	1	「松本手記」と書き込み	74		
9-15	西北満調査資料									綴	1	「外務省 録」と書き込み	100		
9-16	新京終戦後の実相 保健衛生之部									綴	1				
9-17	中国行政区画一覧表									綴	1		102		
9-18	陳情代表報告(武藤正道)									綴	1		101		
9-19	同胞の遣送 自昭和二十一年至二十三年									綴	1		94		
9-20	東満(東満省(東安省、牡丹江省)三江省)(終戦 - 二一、二頃)							編史班		綴	1		64		
9-21	南満									綴	1	南満・大連・蘇家・遼陽・大石橋・海城・熊岳城・撫順・鉄嶺・四平・公主嶺・錦州・阜新・安東・本溪・通化			
9-22	満洲省別概況 六の二									綴	1	黒河省 北安省 竜江省	174		
9-23	開拓団の配置									綴	1		106		
9-24	安東(終戦 - 二二、六遣送)							編史班		綴	1		58		12
9-25	北満									綴	1	北満・吉林・新站・哈爾濱・齊々哈爾・孫吳・佳木斯・東満省・興安省・開拓団、「開拓団の記録 山本氏より」と書き込み			
9-26	満洲関係事業連絡会々員名簿							満洲戦後事業処理会、満蒙同胞援護会		綴	1		112		
9-27	延吉地区ノ状況							元吉林省吉林市警務 赤星敏雄		綴	1		63		
9-28	旧満洲国東北人民政府行政区画対照表							編史班		綴	1		113		30
9-29	東北日僑誌原稿(原本)他に清書あり宮崎専							満蒙同胞援護会		綴	1				
9-29	新站の動勢(原本)小 芳雄記							満蒙同胞援護会		綴	1				
9-29	齊々哈爾終戦後の状況 原本 白井治助							満蒙同胞援護会		綴	1				
9-29	新京を中心とした芸能人の活動状況について(原本)清書あり 益田孝							満蒙同胞援護会		綴	1				
9-29	佳木斯より 元満洲中央銀行佳木斯支店長 馬場光雄 原本							満蒙同胞援護会		綴	1				
9-29	興安総省 原本							編史班		綴	1				
9-29	〔東北地方日本人居住概況表〕	昭和	20	9		未現在				綴	1	表表紙剥落			
9-30	閩島省状況(終戦 - 二一、一頃)							編史班		綴	1		62		
9-31	海城街(終戦 - 二一、六遣送)							編史班		綴	1		11		
9-32	北票街(終戦 - 二三、三)							編史班		綴	1		56		
9-33	東北日僑善後連絡総処救済科業務報告(昭二一、一〇、一五 - 昭二二、一〇、一〇)							編史班		綴	1		78		
9-34	北韓疎開者状況							東北地方救済総会		綴	1		103		
9-35	ソ連による日本軍武解、並びに入り、邦人拉致、拘禁 各地別状況									綴	1		104		
9-36	満鉄終戦後の状況							編史班		綴	1	「これには原稿用紙の一部分しかない」と書き込み	86		
9-37	満鮮情報									綴	1		98		
9-38	安東の状況									綴	1		57		
9-39	北満状況									綴	1				
9-40	白系露人二就テ 福池家久氏緒方事務長遭難状況							興安省カルチン右翼前旗本部青年班長 中内修氏、編史班		綴	1		10		
9-41	遼陽日本人居留民会報告 遼陽日本人居留民会	民国	34	12	13					綴	1		13		

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
9-42	終戦後満洲日本人教育、旧奉天忠 始末記、宗教関係、新京中心芸能活動									綴	1				
9-43	東方文化学会規則									綴	1		71		
9-44	終戦直後に於ける興安北省									綴	1		70		
9-45	引揚に対する米軍援助中共地区状況(吉田報告)									綴	1		99		
9-46	(瀋陽工業会)									綴	1	瀋陽(后東北)工業会、〃商業会、瀋陽証券類処理、長春全、東北日本人所有証券処理、瀋陽房地產処理、長春日本人財産処理、吉林省証券処理、全東北居留民会会計報告			
9-47	昭和二八年十二月現在 編纂資料目録 第 七号(手持資料)							満蒙同胞援護会		綴	1				
9-48	引揚史編纂資料目録									綴	8				
9-49	引揚調査							編史委員会		袋	1				
9-50	引揚調録編集要領(一)									綴	1	「引揚のみ」と手書き	183の 1		
10-1	満洲国史原稿支払明細控	昭和	46		7					綴	1				
10-2	満洲国史関係資料綴	昭和	45							綴	1				
10-3	満洲国史編纂資料	昭和	41			度起		満蒙同胞援護会 東京都港区新橋一丁目五番五号財団法人満蒙同胞援護会		綴	1				
10-4	満洲国史編纂関係書類	昭和	41		5			満蒙同胞援護会		綴	1				
10-5	満洲国史原稿料領収明細書	昭和	46		8					綴	1				
10-6	(領収明細書)	昭和	42-46							綴	1				
10-7	満洲国史編纂関係書類	昭和	43					満蒙同胞援護会		綴	1	第二号			
10-8	満鉄外史(一)									袋	1	「国際運輸会社回顧録」「鞍山関係」 その他が同封			
10-9	満洲国史販売手数料									綴	1				
10-10	満洲国史資料原稿代控	昭和	42			起				綴	1				
10-11	民会長会議録									綴	1		154		
10-12	議事(配布資料)									袋	1	一、編纂業務概況報告 二、目録の原型について 三、今後の業務計画に就て 四、常任委員会の補充に就て 五、満洲事変発端の取扱に就て 六、用語の統一に就て 七、人物小伝に就て			
10-13	原稿料支払控	昭和	46		7					綴	1				
10-14	原稿料領収証	昭和	46		8			満蒙同胞援護会		綴	1				
10-15	満洲地区(一部他地区ヲ含ム)引揚者証券整理綴									綴	1		155		
10-16	(撫順戦犯抑留者日本人名簿)									状	8				
11-1	第五章 考古満蒙関係									綴	1	5回			
11-2	引揚集中営記録									綴	1	一、日誌 二、借入金統計 三、瀋陽 処衛生課員名簿 四、瀋陽証券名簿 五、証券整理簿	153		
11-3	南満洲鉄道株式会社の終戦後の状況									綴	1		87		
11-4	座談会 第十四号 建築関係									袋	1				
11-5	満鉄外史(二)									袋	1				
11-6	満鉄外史(三)									袋	1				
11-7	満鉄外史(四)									袋	1				
11-8	満鉄外史(五)金融政策									袋	1				
11-9	外史 語文書									袋	1	1袋の中に2袋入り「外史 語文書」 「満史会記録」			

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
11-9	満史会									袋	1	1袋の中に2袋入り「外史 諸文書」 「満史会記録」			
11-10	第六年 撫順炭鉱関係									綴	1	6回			
11-11	第七年 日露戦争前後()									綴	1	7回			
11-12	技手、書記以上者名簿(除主任以上者)	民国	35	4	10	力	1946	南満洲鉄道株式会社撫順炭鉱 炭鉱長 宮本慎平		綴	1				
11-13	主任以上者名簿	民国	35	4	10	現在		南満洲鉄道株式会社撫順炭鉱 炭鉱長 宮本慎平		綴	1				
11-14	第三章 外事関係									綴	1	3回			
11-15	第二号 関係									綴	1	2回			
11-16	座談会速記録 第一号 満鉄草創案									綴	1	1回			
11-17	第十二年 都督府関係									綴	1	12回			
11-18	第四年 関東州関係									綴	1	4回			
11-19	第八年 鞍山鉄鉱関係									綴	1	8回			
11-20	第九年 中央試験所関係									綴	1	9回			
11-21	第十章 鉄道建設関係									綴	1	10回			
11-22	第十一章 料亭関係									綴	1	11回			
11-23	座談会 第十三号 言論関係									袋	1				
12-1	ソ軍の進入と邦人に対する暴行状況	昭和	33	3						綴	1	四編28前			
12-2	終戦後に於ける在満邦人人口の動態									綴	1	四編42前			
12-3	終戦後の日本人教育(関東州の分)									綴	1	四編16-2前			
12-4	終戦後の吉林事情	昭和	32	2	19			内田仙次氏		綴	1	四編前			
12-5	終戦後各地物価の動き	昭和	33	5						仮綴	1	四編30前			
12-6	終戦後の日僑文化機関	昭和	21	11		以後のもの 4月 - 10月				綴	1	四編33後			
12-7	東北導報 其一 其二 其三	昭和	21							綴	1	四編前			
12-8	神社仏閣の荒廃と埋葬(宗教事情)									綴	1	四編			
12-9	終戦後各地日本人新聞の発行の状況	昭和	33	3	20					綴	1	四編17前			
12-10	各地に起こりし遭難事件									綴	1	第四編 10/4かへり増田			
12-11	満洲国政府機能の喪失	昭和	33	3	11					綴	1	一編2前			
12-12	皇帝即位と満洲国の解消	昭和	33	3	11					綴	1	一編3			
12-13	終戦と各地日僑の生活及脱出の状況(其二)	昭和	33	4						綴	1	四編27の2前			
12-14	在満邦人概況									綴	1	四編 188			
12-15	終戦前後の現地日本人教育(関東州は別途)		31	10	12					綴	1	四編16-1前			
12-16	終戦と各地日僑の生活及脱出の状況(其一)	昭和	33	4						綴	1	一編27の1前			
12-17	終戦前後における在満日本大使館の動き	昭和	33	3	15					綴	1	一編9前			
12-18	邦人の疎開及避難の状況 其一 其二									仮綴	1	一編8/1前			
12-19	満系要人の動静と抑留									綴	1	一編4前、外包「第一編 引揚史原稿本」			
12-19	政府通化移転の状況									綴	1	第一編の補足資料、外包「第一編 引揚史原稿本」			
12-19	終戦前後の関東軍 其二									綴	1	一編1-2前、外包「第一編 引揚史原稿本」			
12-19	終戦時に於ける関東軍の状況 其一	昭和	33	2	10					綴	1	一編1-1前、外包「第一編 引揚史原稿本」			
12-20	開拓団引揚記 遭難状況		31	9	12					綴	1	七編14後、外包「引揚史 本 原稿 第七、八、九編」			
12-20	開拓団の引揚									綴	1	七編47後、外包「引揚史 本 原稿 第七、八、九編」			
12-20	哈爾濱市に於ける開拓団流入と救済状況	昭和	32	5	6			元哈爾濱實民会救済部長 白田岩夫氏		綴	1	七編後、外包「引揚史 本 原稿 第七、八、九編」			
12-20	終戦後の開拓民の状況									綴	1	七編34後、外包「引揚史 本 原稿 第七、八、九編」			

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
12-20	長春日本人民会の事業		31	12	17			栗田千足氏		綴	1	特八編後、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	終戦に於ける特殊会社の終末	昭和	33	6						綴	1	八編後、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	終戦後の南満鉄道株式会社の状況 其一									綴	1	八編10-1後、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	満洲中央銀行の創立と終焉							長谷川長治氏		綴	1	八編後、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	中長鉄路の経緯	昭和	33	5						綴	1	八編39後、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	終戦後に於ける特殊会社の終末									綴	1	第八編、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	終戦後の南満鉄道株式会社の状況 其二									綴	1	八編10-2後、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	資料 終戦後の満洲電々							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1	八編、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	資料 終戦後の満洲電業							財団法人満蒙同胞援護会		綴	1	八編、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	ソ連樺太引揚者数表									仮綴	1	第九編資料、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	ソ連抑留と引揚状況									綴	1	第九編、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	ソ連引揚年表		34	4	1					綴	1	九編、外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	ソ連の抑留生活 その一									綴	1	外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-20	ソ連の抑留生活 其二									綴	1	外包「引揚史本原稿第七、八、九編」			
12-21	難民の流入と救済状況 其一									綴	1	三編13の1前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	難民の流入と救済状況 其二									綴	1	三編13の2前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	終戦後の孤児養育所 難民救済其三	昭和	33	4			1958			綴	1	三編31前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	終戦後に於ける日本人の自治機関 其一									綴	1	三編、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	瀋陽に於ける終戦後の日本人に対する監督機関の経緯							元瀋陽日僑前後連絡総処主任 坪川興吉		綴	1	三編、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	〔邦人の自治機関〕									綴	1				
12-21	日本人労働組合及民衆連盟の状況	昭和	33	5						綴	1	三編36前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	瀋陽日本人居留会について							立脇耕一氏		綴	1	三編2前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	防疫衛生に関する状況	昭和	33	3	19					綴	1	三編15前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	終戦後在満邦人救済中各地殉職者	昭和	33	5						綴	1	三編32前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	奉天日本人居留会設立について	昭和	32	1	16			宇佐美喬尔氏		綴	1	三編二前参考、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	在外公館等借入金資料 並委託金の経緯 (難民救済金)		31	9	15					綴	1	三編21前、外包「第三編引揚史本原稿」			
12-21	〔神棚解説短冊〕									状	1	長野主膳が奉祀した祭神本居宣長			
12-21	〔原稿断簡〕									状	1	p.43、満蒙同胞援護会の原稿用紙			
13-1	引揚叢書 残務整理									一括	1	(重要文件)			
13-2	事業報告書・会計収支決算書	昭和	39			年度		社団法人国際善隣倶楽部		冊	1	自一月一日至十二月三十一日			
13-3	事業報告書・会計収支決算書	昭和	38			年度		社団法人国際善隣倶楽部		冊	1	自一月一日至十二月三十一日			

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
13-4	事業報告書・会計収支決算書	昭和	34			年度		社団法人国際善隣倶楽部		冊	1	自一月一日至十二月三十一日			
13-5	理事会会議録綴							満蒙同胞援護会		綴	1	自昭和四十二年二月至同四十六年十二月			
13-6	全国支部代表者会議	昭和	30	5	27					綴	1	(二十八年度分もあり)	180		
13-7	理事会議記録									綴	1	自昭二九至四一			
13-8	役員就任承諾書 付理事委嘱書、辞任届、印鑑届									綴	1				
13-9	昭和二十三年度決算報告書の件	昭和	24	4				財団法人満蒙同胞援護会理事長稲垣征夫	石橋米一 齊藤寅吉監事	仮綴	1				
13-10	財団法人満蒙同胞援護会役員名簿	昭和	21	5	1	現在				仮綴	2	ガリ版印刷のものど写植のもの、それぞれ1点ずつ			
13-11	建築工事請負契約書、設計変更二開スル協定書	昭和	21	9	20			建築主財団法人満蒙同胞援護会会長小日山直登、建築請負者奥村組代表者奥村鋈一		仮綴	2				
13-12	財団法人満洲国関係帰国者援護会業務概要	昭和	21	2	15			財団法人満洲国関係帰国者援護会		仮綴	1	(案)			
13-13	財団法人満蒙同胞援護会概況	昭和	24	9				財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1				
13-14	満洲国関係帰国者援護会寄附行為									綴	1				
13-15	満蒙会館(假稱)建設趣意書	昭和	23	11				委員長高崎達之助、副委員長長平島敏夫など		仮綴	1				
13-16	満蒙会館設立資金募集趣意書									仮綴	1				
13-17	経協燃料株式会社定款	昭和	23	2	3			経協燃料株式会社		仮綴	1				
13-18	会報 第5・6月号	昭和	23	6	25			財団法人満蒙同胞援護会		状	12				
13-19	財団法人満蒙同胞援護会決算書	昭和	23			年度				仮綴	1				
13-20	満蒙会館設立資金募集趣意書									仮綴	1				
13-21	満蒙会館(假稱)建設趣意書	昭和	23	11				委員長高崎達之助、副委員長長平島敏夫など		仮綴	1				
13-22	満蒙会館設立資金募集趣意書									仮綴	1				
13-23	満蒙会館(假稱)建設計画(案)									仮綴	1				
13-24	満蒙会館(假稱)建設趣意書(案)	昭和	23	11				委員長高崎達之助、副委員長長平島敏夫など		仮綴	1				
13-25	満蒙会館(假稱)設立折衝関係機関									状	1				
13-26	満洲国政府各局帰還者連絡名簿	昭和	27	3		現在				仮綴	3				
13-27	満蒙同胞援護会賛助会員募集(案)	昭和	24	6		現在				仮綴	1				
13-28	重要書類綴							経協燃料株式会社		仮綴	1				
13-29	満蒙同胞援護会概況	昭和	24	9				財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1				
13-30	財団法人満蒙同胞援護会事業概況							財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1				
13-31	財団法人満蒙同胞援護会事業概況	昭和	22	9						冊	1				
13-32	登記簿抄本	昭和	22	8	19			東京司法事務局世田谷出張所司法事務官秋元一雄		状	3				
13-33	印鑑証明願	昭和	22	8	19			財団法人満蒙同胞援護会理事小日山直登		状	3				
13-34	一、在外公館等借入金整理準備審査会報 二、在外公館等借入金整理準備審査会法施行令 三、外務省告示(在外公館等借入金確認請求書の書式) 四、外務省告示(在外公館等借入金確認証書の様式) 附一、在外公館等借入金の返済の実施に関する法律 二、在外公館等借入金整理準備審査会委員及幹事							外務省在外公館等借入金整理準備審査会事務局		仮綴	1				
13-35	契約書	昭和	22					日本野球連盟会長鈴木龍二、財団法人満蒙同胞援護会会長小日山直登		仮綴	1				
13-36	財団法人満蒙同胞援護会決算書	昭和	22			年度				仮綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
13-37	満蒙商事株式会社決算書(解散時)含経協燃料株式会社	昭和	25	2		月末現在				仮綴	1	極秘			
13-38	昭和二四年度決算書							満蒙商事株式会社		仮綴	1	自昭和二四一年一月一日至昭和二四一年十二月三十一日			
13-39	財団法人満蒙同胞援護会決算書	昭和	25			年度				仮綴	1				
13-40	満蒙同胞資金凍結解除文書									袋	1				
13-41	財団法人満蒙同胞援護会決算書	昭和	27			年度				冊	1				
13-42	在外交館等借入金資料統計	昭和	24	8				在外公館等借入金整理準備審査会事務局		仮綴	1				
13-43	全満日本人居留民会残務整理委員会概要									仮綴	1	控、満蒙援保存用			
13-44	重要文書									袋	1	回覧、日満間郵便為替等決済二関スル協定の件			
13-45	健青倶楽部概要									綴	1				
13-46	(印鑑証明)	昭和								状	5	東京都新宿区市谷仲之町57の112号 武内昌次 明治39年6月20日生			
13-47	故山寮土地について	昭和								綴	1				
13-48	故山寮物件取得状況									綴	1				
13-49	契約書							甲 財団法人満蒙同胞援護会会長平島敏夫 乙 若林善三、渡部芳男		綴	1				
13-50	深谷更生授産所閉鎖に関する件	昭和	31	7	20			東京都千代田区有楽町一ノ二 財団法人満蒙同胞援護会 会長平島敏夫	埼玉県知事栗原浩	仮綴	1				
13-51	閉鎖登記簿抄本その他	昭和	24	7	11					状、仮綴	5				
13-52	「在外公館等借入金整理準備審査会法」について	昭和	24	6	1			外務省管理局内在外公館等借入金整理準備審査会事務局		状、仮綴	2				
13-53	財団法人満蒙同胞援護会概要(本年度事業内容解説)	昭和	38							仮綴	1				
13-54	満蒙歴史資料	昭和	22							袋	12	財団法人満蒙同胞援護会便覧、満洲国政府各部局帰還者中連絡責任者(印)、事務局分課規程、文化規程、財団法人満蒙同胞援護会本部機構一覧表、学生互助会規約			
13-55	事業報告書 会計収支決算書							社団法人国際善隣倶楽部		冊	1	昭和三十七年度(自一月一日至十二月三十一日)			
13-56	事業報告書 会計収支決算書							社団法人国際善隣倶楽部		冊	1	昭和三十六年度(自一月一日至十二月三十一日)			
13-57	事業報告書 会計収支決算書							社団法人国際善隣倶楽部		冊	1	昭和三十五年度(自一月一日至十二月三十一日)			
13-58	証明書発行まで調査した記録	昭和	39			起		満蒙同胞援護会		綴	1				
13-59	財団法人満蒙同胞援護会便覧	昭和	22	6				社団法人満蒙同胞援護会		冊	2				160
13-60	評価換算資料									綴	1	借入金			151
13-61	満洲民会関係書類決算書									袋	1	二十八年度満蒙支部長会議			145
13-62	(履歴書等)									袋	1				
13-63	満蒙同胞援護会整理委員会議事録	昭和	46	10				満蒙同胞援護会		綴	1				
13-64	満洲国国歌(満洲国政府広報の写)									仮綴	1	昭和三十九年五月二十八日於国立国会図書館			
13-65	参徳門問題二関スル経緯書	昭和	22	3				財団法人満蒙同胞援護会事務局長美濃谷善三郎		仮綴	1				
13-66	委員会規程									状	2				
13-67	{打合会メモ}									仮綴	1				
13-68	外地引揚「電気主任技術者」の資格取得についてお知らせ									仮綴	1				
13-69	財団法人満蒙同胞援護会寄附行為									仮綴	1				
13-70	(引揚援護事業下書き)									仮綴	1				

請求番号	表題	元号	年	月	日	年代注記	西暦	作成者	宛て名	形態	点数	備考	号	分類	原本番号
13-71	財団法人満蒙同胞援護会要覧	昭和	35	8						仮綴	1	原稿			
13-72	参徳円問題ニ関スル経緯書	昭和	22	3				財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1				
13-73	参徳円問題ニ関スル経緯書	昭和	22	3				財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1	40 丸秘			
13-74	財団法人満蒙同胞援護会概要(本年度事業内容解説)	昭和	28	11						仮綴	1				
13-75	育英奨学金貸与要綱	昭和						財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1				
13-76	会務指針	昭和						財団法人満蒙同胞援護会		仮綴	1	下書きの綴?			
13-77	在華邦人遺骨引取促進委員会趣意書(案)・在華邦人遺骨引取促進委員会規約(案)・在華邦人遺骨引取懇談会概要									仮綴	5				
13-78	〔満蒙関係終戦殉難者追悼法要式場〕							〔満蒙会〕		状	8	写真4種類8枚 袋あり			
13-79	恐るべき不法監禁 - 中島事件について -							日本健青会中央本部		仮綴	1	別冊資料第51号			
13-80	会員名簿(昭和53年度版)							社団法人国際善隣協会		冊	1				